

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

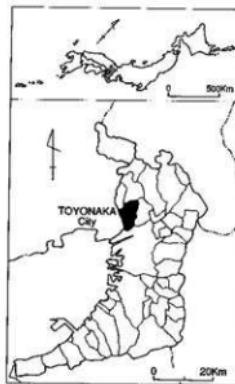
平成13年度(2001年度)

平成14年(2002年)3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 13 年度 (2001 年度)



平成 14 年 (2002 年) 3 月

豊中市教育委員会



## 序 文

豊中市は大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県に接しています。県境を流れる猪名川から常に豊かな水がもたらされ、北方の千里丘陵にかつて広大な森林をひかえたこの地では、古くから人々の生活の場が育まれ、多くの歴史的遺産を受け継いできました。一方、商都大阪に隣接する関係などから、早くから大阪北郊のベッドタウンとしての開発が急速に進められてきました。しかしながら、近年は近郊都市として成熟を迎える中、土地事情の変化によって小規模開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財保護についてすみやかな対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書では、平成13年度に調査を実施した新免遺跡および各遺跡における確認調査に加え、平成12年度後期に調査を実施した新免遺跡・穂積遺跡、および各遺跡における確認調査の成果の一部も合わせて掲載しました。新免遺跡では弥生時代～古墳時代の集落に加えて、中世前期の集落について新たな成果が得られ、穂積遺跡では主に古墳時代中期頃の集落域が調査地にも広がることが確認されるなど、各遺跡で新たな知見が得されました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成14年(2002年)3月29日

農中市教育委員会  
教育長 浅利敬一郎

## 例　　言

1. 本書は、平成13年度国庫補助事業（総額7,500,000円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成12年度国庫補助事業として実施した新免遺跡第50次調査、穂積遺跡第28次調査の成果を併せて収録するものである。
2. 平成13年度事業として、平成13年4月12日から平成14年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げる。
4. 本書の作成は、各報告の執筆を調査担当者が実施した。また、第VI章は各調査担当者の見解をもとに、陣内が執筆した。  
なお、全体の編集を陣内が行なった。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、略北を示す。
6. 挿図・本文中の上色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。
7. 挿図に掲載した出土遺物の縮尺は原則的に1:4とする。
8. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成12年度（平成12年10月以降）発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
新免遺跡	第50次	玉井町2丁目9	98m <sup>2</sup>	陣内高志	2000年10月23日 ～12月22日
穂積遺跡	第28次	服部西町3丁目105-29	78m <sup>2</sup>	橋田正徳	2000年11月27日 ～12月8日

平成13年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
新免遺跡	第51次	玉井町4丁目6	64m <sup>2</sup>	橋田正徳	2001年5月21日 ～6月4日
新免遺跡	第52次	玉井町2丁目1	83m <sup>2</sup>	陣内高志	2001年7月10日 ～7月27日

# 目 次

第Ⅰ章 位置と環境	(陣内)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 稲積遺跡第28次調査	(橋田)
1. 調査の経緯	5
2. 調査の概要	
(1) 基本層序	5
(2) 検出した遺構	7
3.まとめ	7
第Ⅲ章 新免遺跡第50次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	9
2. 調査の成果	
(1) 遺跡の概要	9
(2) 基本層序	10
(3) 検出した遺構と遺物	10
3.まとめ	19
第Ⅳ章 新免遺跡第51次調査	(橋田)
1. 調査の経緯	21
2. 調査の概要	
(1) 基本層序	21
(2) 検出した遺構	22
3.まとめ	23
第Ⅴ章 新免遺跡第52次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	25
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	25
(2) 検出した遺構と遺物	25
3.まとめ	31
第VI章 確認調査の成果	33

# 挿図・表目次

## (第Ⅰ章)

- 第1図 市内遺跡分布図 (1:50,000) ..... 2

- 第2図 調査地点と周辺地形 (1:50,000) ..... 4

## (第Ⅱ章)

- 第3図 調査範囲図 (1:200) ..... 5

- 第4図 調査地位置図 (1:5,000) ..... 5

- 第5図 調査区平面・断面図 (1:80) ..... 6

## (第Ⅲ章)

- 第6図 調査範囲図 (1:300) ..... 9

- 第7図 調査地位置図 (1:5,000) ..... 9

- 第8図 調査区平面・断面図 (1:100) ..... 11・12

- 第9図 竪穴住居1平面・断面図 (1:60) ..... 13

- 第10図 竪穴住居1出土遺物 (1:4) ..... 13

- 第11図 竪穴住居2平面・断面図 (1:60) ..... 14

- 第12図 竪穴住居2出土遺物 (1:4) ..... 14

- 第13図 竪穴住居3・4平面・断面図 (1:60) ..... 15

- 第14図 竪穴住居3および焼土周辺出土遺物 (1:4) ..... 15

- 第15図 竪穴住居5平面図 (1:60) ..... 16

- 第16図 土坑・ピット出土遺物 (1:4) ..... 17

- 第17図 包含層出土遺物 (1:4) ..... 18

- 第18図 卡類 (1:1.25) ..... 19

- 第19図 竪穴住居変遷模式図 (1:400) ..... 20

## (第Ⅳ章)

- 第20図 調査範囲図 (1:200) ..... 21

- 第21図 調査地位置図 (1:5,000) ..... 21

- 第22図 調査区平面・断面図 (1:80) ..... 22

## (第Ⅴ章)

- 第23図 調査範囲図 (1:300) ..... 25

- 第24図 調査区平面・断面図 (1:80) ..... 26

- 第25図 捨立柱建物1平面・断面図 (1:60) ..... 27

- 第26図 溝4出土遺物 (1:4) ..... 27

- 第27図 土坑1平面・断面図 (1:40) ..... 28

- 第28図 土坑1出土遺物 ..... 28

- 第29図 土坑2・3出土遺物 (1:4) ..... 29

第30図 ピット・包含層出土遺物（1：4）	30
第31図 谷地形の分布（1：800）	31
(第VI章)	
第1表 確認調査一覧表	33・34
第32図 確認調査地点位置図（1：50,000）	35
第33図 トレンチ掘削状況	36
第34図 トレンチ断面図	36
第35図 トレンチ掘削状況	36
第36図 トレンチ断面図	36
第37図 トレンチ掘削状況	37
第38図 トレンチ平面・断面図	37
第39図 トレンチ掘削状況	37
第40図 トレンチ断面図	37
第41図 トレンチ掘削状況	38
第42図 トレンチ断面図	38
第43図 トレンチ掘削状況	38
第44図 トレンチ断面図	38
第45図 トレンチ掘削状況	39
第46図 トレンチ断面図	39
第47図 トレンチ掘削状況	39
第48図 トレンチ断面図	39
第49図 トレンチ掘削状況	40
第50図 トレンチ平面・断面図	40
第51図 トレンチ掘削状況	40
第52図 トレンチ断面図	40
第53図 トレンチ掘削状況	41
第54図 トレンチ断面図	41
第55図 トレンチ掘削状況	41
第56図 トレンチ断面図	41
第57図 トレンチ掘削状況	42
第58図 トレンチ断面図	42
第59図 トレンチ掘削状況	42
第60図 トレンチ断面図	42
第61図 トレンチ掘削状況	43
第62図 トレンチ断面図	43
第63図 トレンチ掘削状況	43

第64図	レンチ平面・断面図	43
第65図	レンチ掘削状況	44
第66図	レンチ平面・断面図	44
第67図	レンチ掘削状況	44
第68図	レンチ断面図	44
第69図	レンチ掘削状況	45
第70図	レンチ断面図	45
第71図	レンチ掘削状況	45
第72図	レンチ断面図	45
第73図	レンチ掘削状況	46
第74図	レンチ断面図	46
第75図	レンチ掘削状況	46
第76図	レンチ断面図	46
第77図	レンチ掘削状況	47
第78図	レンチ断面図	47
第79図	レンチ掘削状況	47
第80図	レンチ断面図	47
第81図	レンチ掘削状況	48
第82図	レンチ配置・断面図	48
第83図	レンチ掘削状況	48
第84図	レンチ平面・断面図	48
第85図	レンチ掘削状況	49
第86図	レンチ断面図	49
第87図	レンチ掘削状況	49
第88図	レンチ断面図	49
第89図	レンチ掘削状況	50
第90図	レンチ断面図	50
第91図	レンチ掘削状況	50
第92図	レンチ断面図	50
第93図	レンチ掘削状況	51
第94図	レンチ断面図	51
第95図	レンチ掘削状況	51
第96図	レンチ断面図	51
第97図	レンチ掘削状況	52
第98図	レンチ断面図	52
第99図	レンチ掘削状況	52

第100図	トレンチ断面図	52
第101図	トレンチ掘削状況	53
第102図	トレンチ断面図	53
第103図	トレンチ掘削状況	53
第104図	トレンチ平面・断面図	53
第105図	トレンチ掘削状況	54
第106図	トレンチ断面図	54
第107図	トレンチ掘削状況	54
第108図	トレンチ断面図	54
第109図	トレンチ掘削状況	55
第110図	トレンチ断面図	55
第111図	トレンチ掘削状況	55
第112図	トレンチ平面・断面図	55
第113図	トレンチ掘削状況	56
第114図	トレンチ断面図	56
第115図	トレンチ掘削状況	56
第116図	トレンチ平面・断面図	56
第117図	トレンチ掘削状況	57
第118図	トレンチ断面図	57
第119図	トレンチ掘削状況	57
第120図	トレンチ断面図	57
第121図	トレンチ内堆積状況	58
第122図	トレンチ断面図	58
第123図	トレンチ掘削状況	58
第124図	トレンチ断面図	58
第125図	トレンチ掘削状況	59
第126図	トレンチ断面図	59
第127図	トレンチ掘削状況	59
第128図	トレンチ断面図	59
第129図	トレンチ掘削状況	60
第130図	トレンチ断面図	60
第131図	トレンチ掘削状況	60
第132図	トレンチ断面図	60
第133図	トレンチ掘削状況	61
第134図	トレンチ平面・断面図	61

# 図 版 目 次

## 図版 1 穂積遺跡第28次調査

- (1) 調査区全景（南から）
- (2) 調査区西壁面

## 図版 2 新免遺跡第50次調査

- (1) 調査区南側全景（北から）
- (2) 調査区北側全景（南から）

## 図版 3 新免遺跡第50次調査

- (1) 壺穴住居 1 遺物出土状況  
(北東から)
- (2) 壺穴住居 1 完掘状況（北東から）

## 図版 4 新免遺跡第50次調査

- (1) 壺穴住居 2（南西から）
- (2) 壺穴住居 3・4（東から）

## 図版 5 新免遺跡第50次調査 出土遺物

- (1) 壺穴住居 1（第10図 1）
- (2) 壺穴住居 1（第10図 5）
- (3) 壺穴住居 1（第10図 3）
- (4) 壺穴住居 2（第12図 1）
- (5) 土坑 1（第16図 2）
- (6) 土坑 1（第16図 3）
- (7) 土坑 1（第16図 1）
- (8) ピット 4（第16図 7）

## 図版 6 新免遺跡第50次調査 出土遺物

- (1) 壺穴住居 3（第14図 1）
- (2) 壺穴住居 3（第14図 2）
- (3) 壺穴住居 3（第14図 3・4）
- (4) ピット 1（第16図 4）

## 図版 7 新免遺跡第50次調査 出土遺物

- (1) ピット 2（第16図 5）

- (2) 包含層（第17図2）
- (3) 包含層（第17図4）
- (4) 包含層（第17図3）
- (5) 包含層（第17図10）
- (6) 包含層（第17図8）
- (7) 包含層（第17図9）

図版8 新免遺跡第50次調査 出土遺物

- (1) 包含層（第17図6）
- (2) 石器
- (3) 卡類（第18図1～4）

図版9 新免遺跡第51次調査

- (1) 1区全景（北から）
- (2) 2区全景（南から）

図版10 新免遺跡第52次調査

- (1) 調査区西側（東から）
- (2) 調査区東側（西から）

図版11 新免遺跡第52次調査

- (1) 土坑1（南から）
- (2) 落ち込み1（西から）

図版12 新免遺跡第52次調査 出土遺物

- (1) ピット1（第30図1）
- (2) 土坑2・3（第29図4）
- (3) 上坑1（第28図5）
- (4) 土坑1（第28図4）
- (5) 土坑1（第28図2）
- (6) ピット3（第30図5）



## 第Ⅰ章 位置と環境

### 1. 地理的環境

豊中市は大阪府の北西部に位置し、西は猪名川をはさんで兵庫県と接している。なかでも、南を大阪市と接することから早くから宅地造成等の開発が進み、現在では大阪北郊でも有数の住宅都市として知られる。ここで、市内の地形を概観すると、市域の北東部は千里丘陵の西端を形成しており、続いて北西部は千里川によって形成された中・高位段丘面が広がる。市域中部は、北西部と同様に千里川などによって形成された低・中位段丘面である通称豊中台地が広がり、また、市域西～南部にかけては、猪名川・天竺川などの沖積作用によって形成された沖積低地が広がっている。以上のように豊中市の地形は、*Li*視的にみて北東部は丘陵地・台地、南西部は沖積低地に区分されるが、*微視的には河川や丘陵地・台地などの形成過程の違いなどによって細分が可能である。* 豊中の地に當まれた遺跡では、上述の地形的な特性に応じて地域ごとに、あるいは時代ごとに多様な生活が當まれていたことは想像に難くない。

今回第Ⅱ章で報告する穂積遺跡は、豊中台地より南側で猪名川と天竺川に挟まれた沖積低地に形成された微高地上に立地する。第Ⅲ～V章で報告する新免遺跡は、通称豊中台地の北西部に位置し、千里川左岸の低位段丘面に立地する。

### 2. 歴史的環境

**旧石器時代** 現在、豊中市域において人々の活動が確認されているのは後期旧石器時代まで遡る。これまでにナイフ形石器が柴原、螢池北、螢池西などの遺跡から計10点程出土しているが、明確な遺跡は知られていない。

**繩文時代** 繩文時代の遺跡の分布は、野畑（中～後期）、野畠春日町（中～晚期）、内山（後期）、柴原（晚期）など主に千里川流域に集中する。一方沖積低地では、從来から原山西遺跡（中期）が知られていたが、近年、穂積遺跡の調査でも繩文海進期の海岸を検出した折に土器片錐（中期）が出土したことなどから、中期には狩猟採集活動を中心とする北部の遺跡と、漁業等を営んでいた南部の遺跡という、それぞれの地理的特性に応じた生業を行っていたことが確認された。

**弥生時代** 豊中の地で弥生文化が定着するのは弥生時代前期中段階以降であり、勝部遺跡によって代表される。同じ頃、小曾根や山ノ上などの遺跡において前期土器と繩文晚期土器が共伴して出土しており、弥生文化の浸透には大きな軌跡はなかったものとみられている。中期になると集落の数は一気に増大する。勝部、小曾根など沖積低地の遺跡は依然継続し、新たに台地上でも新免、螢池北などの集落が出現する。これらの遺跡の多くは居住城と墓域がともにみとめられ、拠点集落としての性格を有している。後期になると勝部、小曾根などの拠点集落は一旦衰退に向かうのに対し、新免遺跡は後期以降も依然維持される。第Ⅲ～V章で報告する新免遺跡では、中

歴史的環境



第1図 市内遺跡分布図 (1 : 50,000)

期から終末期にかけて集落が継続される様子を確認している。また後期以降、沖積低地で新たに出現する服部、憩積、島田遺跡などの遺跡はこれまでほとんど見られなかった他地域の土器が散見されるようになり、幅広い交流を基礎に据えた集落とみられる。また、終末期の服部遺跡では突出部を有する周溝墓（前方後円形周溝墓）が出現し、すでに集落内では階層化が大きく進行していた社会的状況が考えられる。

**古墳時代** 古墳時代の集落は、弥生時代の集落の立地を踏襲するものが多いが、前代から継続するものは利倉西、小曾根遺跡など少数に限られる。その他の集落は弥生時代終末期～古墳時代前期の間に途絶し、中期～後期に再び展開するようであり、特に本町など丘陵上の集落で顕著である。一方沖積低地では、徐々に拡大化する上津島、島田など猪名川流域の集落を除くと、中期以降次第に衰退に向かっており、二極分化の傾向がうかがえる。

古墳の動向に目を転じると、前期後半から中期を通して築造された桜塚古墳群は、その規模や副葬品などから百舌鳥・古市古墳群の被葬者と軍事的に密接な関係がうかがわれ、猪名川左岸一帯に影響を及ぼしていたものと考えられる。螢池東遺跡の大形倉庫は、桜塚古墳群と一部時期が重複しており関連が注目される。桜塚古墳群が衰退する中期以降、千里川上流では桜井谷窪跡群において須恵器の生産が開始される。同じ頃に集落域が拡大する新免・本町遺跡は、須恵器の不良品を多数含む土坑・溝を検出しており、桜井谷の須恵器生産・流通に関わった集落とみられている。また古墳時代後期以降、千里川流域では太鼓塚古墳群・野畑春日町古墳群・新免宮山古墳群などの群集墳が築造され、これらの被葬者は須恵器生産の掌握に関わったと考えられる。

**古代～中世** 飛鳥時代は金寺山魔守が創建され、隣接する本町遺跡との関連が考えられる。奈良時代～平安時代前期は丘陵地に曾根遺跡、猪名川下流域に島田、上津島、上津島南などの官衙的色彩を持つ遺跡が立地する一方で、從来からの一般集落は平安時代前期頃から徐々に解体し始め、既往の集落領域とは異なる場所に散在するなど集落再編の兆しをみせる。

平安時代後期の小曾根、憩積遺跡は、攝關家領垂水西牧櫻坂郷六カ村の1つに数えられている。ここでは、一定の区画のもと建物や戸井等が配置された状況が次第に明らかになりつつあり、平安後期以降、經營の安定化に成功した名主層の台頭がうかがえる。丘陵地の中世集落は熊野田（14世紀）、山ノ上、蟹池東、曾根（以上11世紀後半）などが挙げられるが、今回の新免遺跡では地理的に近接する山ノ上遺跡との関連も含め、丘陵地における中世集落の成立と耕地化の過程を考える素材が提供されたものと考えられる。

**室町～戦国時代**は、近年原田城南城の堀が調査され、「戦いのための北城、平時の居館としての南城」という、機能を分担しつつ併存していた從来の見方を見直す必要が生じている。

**近世以降** 阪急螢池駅西側に所在する麻田藩陣屋跡は、唯一豊中に居を構えた大名青木氏の居城である。近年、陣屋を囲う濠の一部や、陣屋内における屋敷地の区画や建物等に伴ったとみられる礎石の並ぶ様子などが確認され、18～19世紀代の遺物も多数出土した。これらの発掘成果によって、近世の近畿地方における大名屋敷の実態がより鮮明に浮かび上がってきている。



第2図 調査地点と周辺地形 (1 : 50,000)

## 第Ⅱ章 穂積遺跡第28次調査

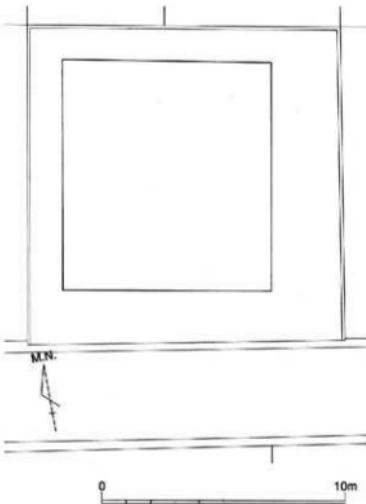
### 1. 調査の経緯

当調査区は豊中市服部西町3丁目105-29に所在する。今回、個人住宅建築に伴い平成12年（2000年）10月20日に埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成12年（2000年）11月2日に確認調査（『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成12年度（2000年度）』掲載）を行った。この結果、敷地内に遺構の存在が確認されたことから本調査を行うこととなった。

### 2. 調査の概要

#### （1）基本層序

当調査区は、既往の調査区と同様に宅地造成に伴う盛り土から遺構検出面となつた明青灰色極細粒砂層まで約1.8mほどの堆積がみられる。宅地造成に伴う盛り土および土層1

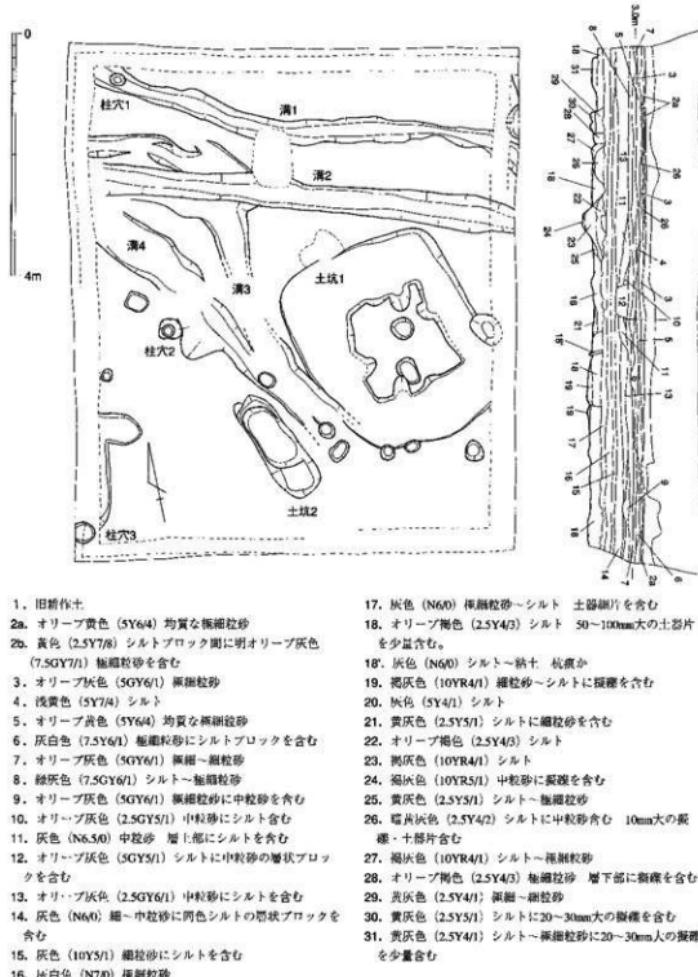


第3図 調査範囲図（1：200）



第4図 調査位置図（1：5,000）

## 2. 調査の概要



第5図 調査区平面・断面図 (1:80)

(造成直前の耕土層)と土層2・3(上層1に伴う床土層)、土層17を除く各層は水成層となる。このうち、土層9上面から幅2m、深さ0.2mほどの溝が断面で確認され、周囲が耕地化していたことが示唆される。ただし、その時期については、遺物が出土していないため明確ではない。また、土層17は褐色系の土壤化した堆積土で、その上面から溝1・2、土坑1などの遺構が掘削されている。なお、遺構面にいたる各堆積層から時期を特定するほどの遺物は出土していないため、その堆積時期は明確ではない。

## (2) 検出した遺構

今回の調査では、溝4条、土坑2基、柱穴を含むピット多数を検出した。以下、主要な遺構について、その概要を述べる。

**溝1～4** 調査区で検出した溝は、東西方向の溝1・2と北西から南東に向く溝3・4の2つに区分できる。これらの溝はいずれも幅0.5m前後、検出面における深さは3～10cm程度の浅いものであるが、土層17の上面から掘削されており、実際の深さは20～30cm程度となる。なお、溝2からは円形の透孔を施した須恵器高杯脚部片が出土しており、その堆積時期は古墳時代中期頃と考えられる。

**土坑1** 土層17上面から掘削された南北3m前後、東西2.9m前後の平面方形に近い土坑である。土坑の周囲は、検出面から深さ3～5cm前後をはかるが、土坑中央付近は盛り上がり、通常の土坑とは様相を異なる。

土坑1は堅穴住居となる可能性も考えられるが、土坑内外において柱穴は認められないため、その性格は明確ではない。また、土坑からは遺物が出土しなかったため、その時期は不明である。

**土坑2** 主軸長1.8m、幅0.6m前後、深さ0.35mをはかる平面隅丸長方形を呈する土坑である。土坑中層～下層の埋土は摺疊を多く含み、一見して密集土坑群のものと類似するが、土坑下部に抉り込むような拡張はない。

土坑2の主軸方向は土坑1と同じく北西を向き、その位置も近接していることから、同時期の所産となる可能性も残されている。

**柱穴** 調査区一帯で多数のピットを検出したが、明確な柱痕を伴うものは柱穴1～3の3基に限られる。これら柱穴は、調査区西部で検出したが、その形状・掘削深度・位置関係からみて同一の建物に伴う可能性は考えにくく、調査区西方に複数の建物あるいは堅穴住居が存在する可能性を指摘するだけにとどまる。

## 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代中期頃の溝2をはじめとする遺構を検出した。近接する第9次調査区では弥生時代終末期前後の掘立柱建物や井戸が確認され、当該期の単位群が周辺に展開したものと考えられる。しかし、今回の調査では明確にこの時期に比定される遺構は確認されず、単位群

### 3. まとめ

はそれほど広い範囲に展開しなかった可能性が考えられる。なお、当調査区と第9・11次調査区においては検出した遺構は比較的散漫であり、密集度の高い遺跡東部とその様相は明らかに状況が異なる。いまのところ、中枢部と区分できるような地形界などは確認されておらず、このような景観の相違がどのような要因によるものなのか、課題として残される。

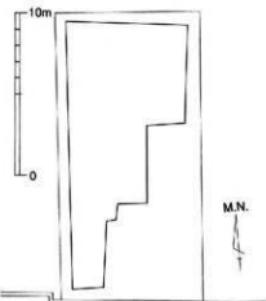
一方、当調査区では古墳時代中期頃の溝などが確認され、この時期に何らかの開発がなされた可能性が考えられる。この時期、穂積遺跡東部を中心とする集落は衰退し、その展開をたどることは困難になる。このような集落中枢部の状況に相反して、再び遺跡西部に遺構の展開がみられることは、穂積遺跡の集落を構成するそれぞれの単位群がその衰退過程において遺跡一帯に分散したとみることもできる。しかしながら、各単位群の展開を示す遺構は未だに少なく、その推移については今後の課題となろう。

以上、当調査区における調査成果から、穂積遺跡における弥生時代・古墳時代の集落の推移を検討した。当調査区一帯における集落の様相はまだ明確ではないものの、これまで述べたように穂積遺跡における集落の衰退過程を知る上で重要な知見をもたらすであろう。よって、今後とも周辺の開発等においては、より慎重な計画を期す必要がある。

## 第三章 新免遺跡第50次調査

### 1. 調査の経緯

当調査区は、豊中市玉井町2丁目9に所在する。平成12年9月18日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成12年10月12日に確認調査を行ったところ、地表下35cmで遺物包含層を、同50~55cmで遺構面を確認した。申請地では個人住宅の建設が予定されていたが、建物の基礎が遺構面に及ぶことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。調査は、平成12年10月23日から平成12年12月22日にかけて実施した。



### 2. 調査の成果

#### (1) 遺跡の概要

第6図 調査範囲図（1：300）

新免遺跡は阪急宝塚線豊中駅の西側一帯（現在の玉井町全域と末広町・立花町の一部）に広がる集落遺跡である。遺跡は各時代にわたるが、特に弥生時代中期には東西約500m、南北300m程度と市内でも屈指の規模を有する拠点集落へと発展する。また古墳時代中期末葉に再び集落



第7図 調査位置図（1：5,000）

## 2. 調査の成果

は発展をみせ、後期以降は同遺跡南部に集造される新免古墳群との関連も注目される。

古墳時代中～後期の新免遺跡では、今回の調査地周辺で実施された第11次、19次調査などで焼け歪んだ須恵器が多く含んだ溝・土坑が検出されている。これらの遺構は、須恵器の廃棄場所としての性格が考えられることから、当該期の新免遺跡は隣接する本町遺跡と同様に千里川上流の桜井谷窯跡群で生産された須恵器が当地に一旦集積され、須恵器の選別等を行う集落であったことが考えられる。

### (2) 基本層序

当調査地では、1層：現代の盛土および搅乱土、2層：褐色極細粒砂層、3層：褐色極細粒砂～シルト層、4層：暗褐色シルト層、5層：黄褐色シルト層の順に堆積する。

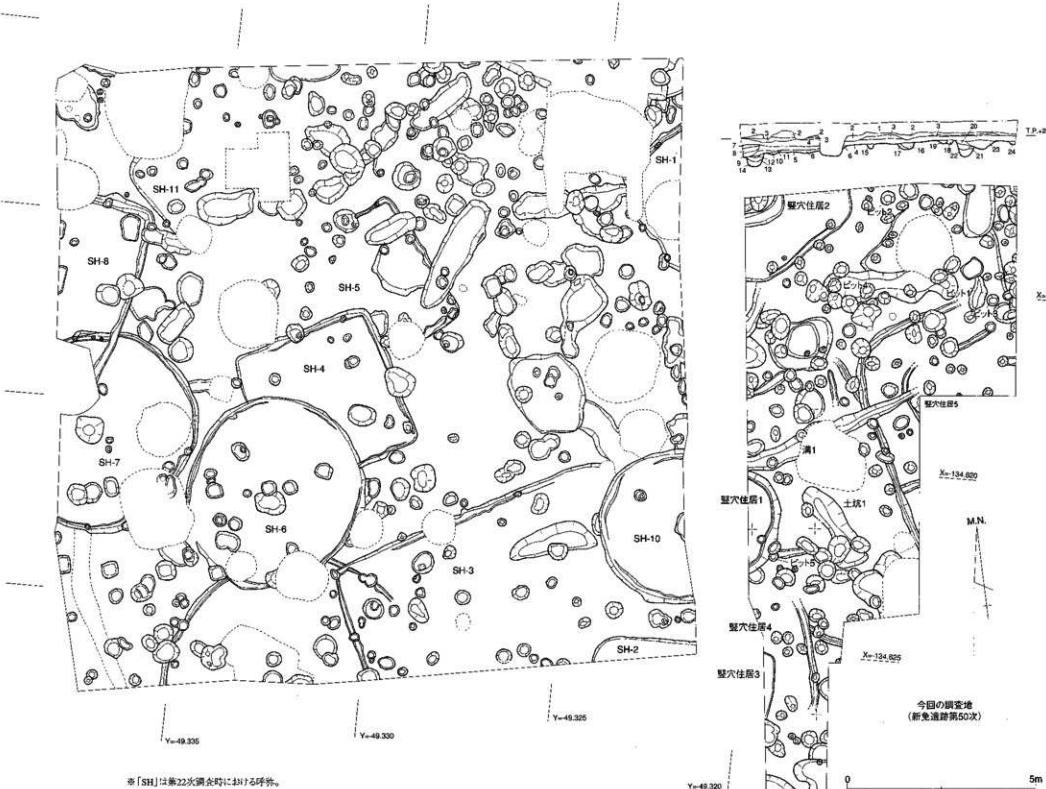
2層は耕作行為による巻き上げ等によって下層との層理面が不明瞭であること、鉄分が斑紋状に沈着することなどから耕作土と考えられる。3層も2層とはほぼ同様の特徴を有し、細片ながら瓦器・埴輪片等を包含することから中世以降の耕作土と考えられる。4層は、層厚15cm程度を有し、層中の上下を問わず弥生土器、土師器、須恵器を包含する遺物包含層である。これは当初弥生時代の遺物包含層が存在したが、古墳時代以降、弥生時代の遺物包含層、あるいは遺構等を削平するような行為が行われた結果形成されたものと考えられる。5層は当調査地の基盤層に相当する。なお、遺構は4層（遺物包含層）上面においても存在したが、切り合ひ等の判別が困難であったため、5層上面において確認し調査を実施した。

### (3) 検出した遺構と遺物

当調査地は第22次調査地（1987年度実施）の東隣にあたり、2つの調査成果をつなぎ合わせることで多くの成果が得られた。以下、第22次調査の成果（「III. 第22次調査地点」「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1987年度」）を取り入れつつ、検出した主要な遺構・遺物の報告を行う。

竪穴住居1　調査区中央の西側で東端部分を検出した。当竪穴住居は第22次調査時に西側を検出しており（22次：SH-10）、今回東端部分を検出したことで住居の輪郭がほぼ判明した。南北径4.1m、東西径4.4mをはかり、東西方向が若干長い楕円形の平面を呈し、検出面から床面までの深さは0.4m程度である。床面周囲には、幅約10cmの壁溝を巡らす。当調査地では主柱穴と考えられるものは確認していない。埋土は3層に大別でき、基底面付近に堆積する下層（4、18、19層）は炭化材を含むにぶい黄褐色細粒砂層、中層（2、17層）は弥生土器片を多数包含する黒褐色極細粒砂～シルト層、上層（1、12、13層）は基盤層ブロックを含むにぶい黄褐色極細粒砂層からなる。以上の埋土の特徴から、当住居は焼失した後土器片が一括投棄され、その後に完全に埋め戻されたと推察され、第22次調査時の所見と同様である。

第10図1～6に示した出土遺物は、いずれも中層出土である。1は復元口徑12.0cm、残存高5.1cmをはかる壺片である。口縁端部外面は二条の凹線が巡る。肩部～体部外面は縱方向のハケ、

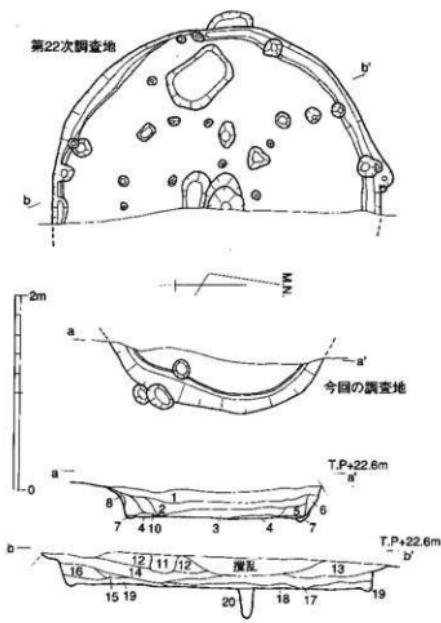


第8図 調査区平面・断面図（1:100）

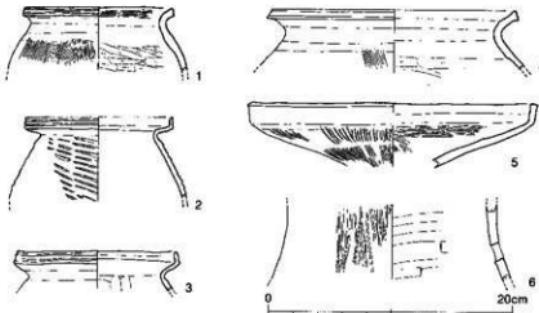
1. 桜の花、桜吹雪。  
2. 風船（HYBRID）：風船模型。山形航行。  
3. 風船（HYBRID）：風船模型。山形航行。  
4. 風船（HYBRID）シルト、鹿島～奈良門での風船合戦。  
5. にいふくじ（HYBRID）：風船模型シルト。  
6. にいふくじ（HYBRID）：風船模型シルト。基礎部プロックを少々含む。  
7. にいふくじ（HYBRID）：風船模型シルト。  
8. 風船（HYBRID）：風船模型。山形航行。  
9. にいふくじ（HYBRID）：風船模型シルト。基礎部プロックを少々含む。  
10. 風船（HYBRID）：風船模型シルト。  
11. 風船（HYBRID）：風船模型。基礎部プロックを少々含む。  
12. 長崎模型（HYBRID）：海賊船模型シルト。基盤部プロックを少々含む。  
13. 利用品（HYBRID）：模型船。廃物化を少し含む。  
14. 利用品（HYBRID）：森林模型。廃物化を多く含む。基礎部プロックを少々含む。  
15. にいふくじ（HYBRID）：風船模型シルト。基礎部プロックを少々含む。  
16. 風船（HYBRID）：風船模型。基礎部プロックを少々含む。  
17. 風船（HYBRID）：風船模型。基礎部プロックを少々含む。  
18. 風船（HYBRID）：風船模型。基礎部プロックを少々含む。  
19. 風船（HYBRID）：風船模型。基礎部プロックを少々含む。  
20. 風船（HYBRID）：風船模型。基礎部プロックを少々含む。  
21. 小型模型（HYBRID）：船・帆船模型。廃物化を少々含む。基礎部プロックを少々含む。  
22. 小型模型（HYBRID）：船・帆船模型。廃物化を少々含む。基礎部プロックを少々含む。  
23. 小型模型（HYBRID）：帆船模型シルト。帆船化を少々含む。  
24. 小型模型（HYBRID）：帆船模型シルト。帆船化を少々含む。基礎部プロックを少々含む。  
25. 小型模型（HYBRID）：帆船模型。帆船化を少々含む。基礎部プロックを少々含む。

審査報告書中で第22次廃止部分の十色表記については、  
「三 新免造跡第22次調査地点」「鹿中小市駄藏文化財発  
掘調査報告 1987年」に記した。

内面は横方向のケズりがみとめられる。2は復元口径12.0cm、残存高6.5cmをはかり、受け口状の口縁部形態を有する壺片である。口縁端部外面には二条の凹線が巡る。外面は頸部直下から右下がりのタタキが施される。3も2と同様に口縁部は受け口状を呈する壺であり、復元口径13.0cm、残存高3.1cmをはかる。肩部から受け口部への移行は2よりも若干ゆるやかである。4は復元口径19.8cm、残存高4.6cmをはかる壺片である。体部内面には横方向のケズりが施される。5は高杯杯部片であり、復元口径23.6cm、残存高5.2cmをはかる。皿形の杯部であり、口縁部付近で内側に崩曲する形態である。外面は縱方向のハケ調整である。6は器台と考えられる。上下・傾きは疑問を残すが、残存部分での最大径は約20cm、残存高は6cm程度をはかる。外面は縱方向のミガキを密に施す。



第9図 竪穴住居1平面・断面図(1:60)



第10図 穂穴住居1出土遺物（1：4）

## 2. 調査の成果

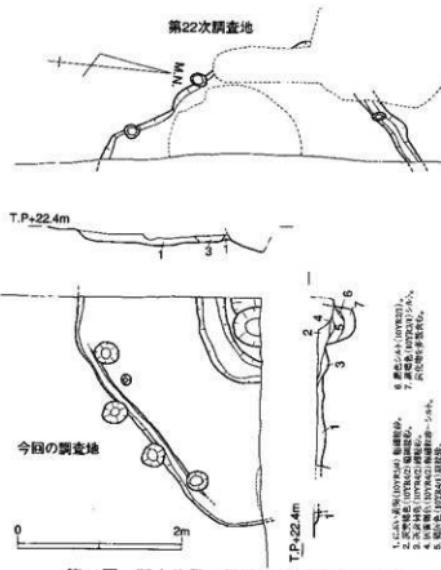
内面は主に横方向のナデを施すが、起伏が多く粗雑である。また円形の透かしがみとめられるが、小片のためその配置は不明である。図版8：(2) - 1は打製石器であり、中層の土器群とともに出土したものである。残存長3.0cm、最大幅2.0cmをはかる有茎式石器であり、刃部先端部と基部は欠損している。一部で階段状剥離がみとめられる。

第22次調査地も含めた出土遺物の特徴について若干触れておく。まず甕は2・3のように受け口状口縁がみられ、1・4の体部内面にはケズリを施すこと、また甕では第22次調査部分で長頸甕が出土していることなど、型式的・技術的にみて西浜地方におけるV様式前葉に帰属する様相がうかがえる。また文様については、漸次無文化が進行していくなかで凹線を施す甕、甕などが一定量みとめられるなど、第22次調査時と同様に畿内第IV様式から第V様式への移行期と見受けられるものが目立つことも特徴としてあげられる。しかし、V様式前葉まで凹線文が若干残るとされる西浜地方の土器相を考慮する限り竪穴住居1中層の土器群は畿内第V様式初頭（森山編年V-0～1様式）の所産とみられ、住居の埋没も当該期以降と考えられる。

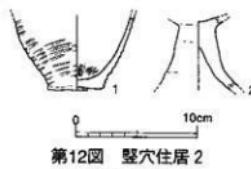
**竪穴住居2** 調査区北西端で検出した。第22次調査（22次：SH-1）では平面が方形と考えられていたが、今回は鈍角のコーナーを有しており、平面が多角形である可能性も考えられる。第22次調査部分を合わせると東西端からの幅約4.3m、一辺は約3.5m程度をはかり周囲には幅8cm程度の壁溝が巡っていたものと考えられる。基底面中央付近でみつかったピットは径約50cm、

深さ40cmをはかり、埋土は炭粒を多数含んだ黒褐色シルトであることなどから炉穴と考えられる。床面では上柱穴とみられるものは確認していないが、壁溝沿いに支柱穴の可能性が考えられる柱穴がみられる。遺存した埋土は3～5cm程度であり、基盤層ブロックを多く含んだしまりの強いにぶい黄褐色極細粒砂層に限られる。

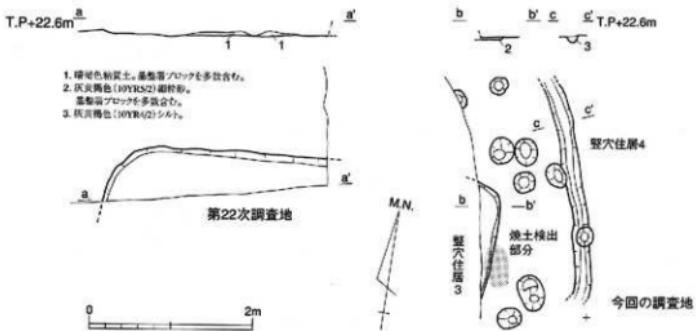
出土遺物（第12図1・2）は、い



第11図 竪穴住居2 平面・断面図 (1:60)



第12図 竪穴住居2  
出土遺物 (1:4)

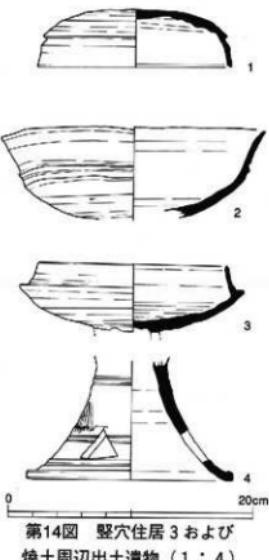


第13図 壁穴住居3・4平面・断面図 (1:60)

ずれも壁穴炉中からの出土である。1は壺底部片とみられ、底部径4.4cm、残存高5.9cmをはかる。外面には右上がりのタタキが施される。2は高杯の脚部片であり、残存高は5.8cmをはかる。中実の柱状部から裾部に向けて徐々に開いていくものとみられる。1・2はV様式でも後半期の特徴を有するものとみられ、壁穴住居2は当該時期に機能していたことが考えられる。

壁穴住居3 調査区南側で検出した。北東隅を検出したに過ぎないが、22次調査時部分（22次：SH-2）を合わせると、一辺4.7mをはかる方形の住居が考えられる。基底面では主柱穴とみられるものは確認できなかった。遺存した埋土は2cm程度であり、基盤層ブロックを多く含む黄灰色極細粒砂である。なお、東壁際から住居外にかけて焼土ブロックの堆積を確認し、そのすぐ東側では須恵器高杯等が出土した。これらは当住居に伴うカマドの一部と推定されたが、主に住居より外側で検出されたこと、須恵器の出土位置が住居基底面から浮いていることなどから、機能時の位置をとどめているのではなく、すでに崩落後あるいは廃絶後の状態を呈しているものとみられる。

第14図1は住居内出土の須恵器杯蓋であり、口径15.6cm、器高4.5cmをはかる。2～4はいずれも焼土周辺での出土である。2は無蓋高杯の杯部である。復元

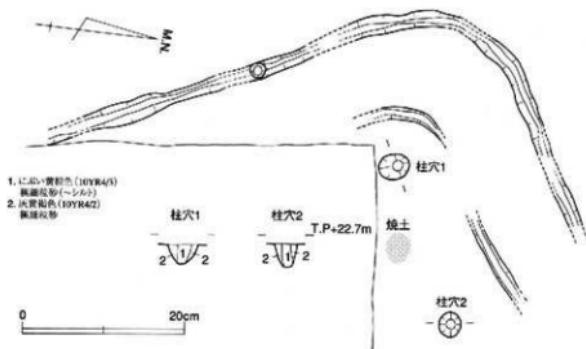
第14図 壁穴住居3および  
焼土周辺出土遺物 (1:4)

## 2. 調査の成果

口径21.4cm、残存高8.4cmをはかるが、焼け歪みがあるため口径の復元には疑問を残す。外に開いていく口縁部を有し、体部外面には一条の沈線が巡るが不明瞭である。3・4はそれぞれ有蓋高杯の杯部と脚部に相当し、同一個体を形成するものとみられる。杯部（第14図3）の口径は15.4cm、脚部を含めた器高は約15.5cmをはかり、口縁端部は丸く收まる。脚部（第14図4）は下半部に三角形の透かしを三方に施し、さらに杯部との接合部付近でも、長さは不明であるが幅0.5cm程度の方形透かしが三方向に施されていることが確認できる。また脚部には二条の沈線と波状文がそれぞれ2か所みとめられる。2は口径やかえりなどの特徴から田辺縄年TK-10型式に帰属するものとみられる。また、第14図2～4とともに白玉が1点出土した（第18図2）。直径7.5mm、厚さは4.6mmをはかり、断面は白状の形状を呈する。側面は比較的丁寧に研磨されており、後はみとめられない。これらの遺物は出土位置からみて、本来は当住居、および焼土に伴っていた可能性が考えられる。第14図1は6世紀前半の所産とみられ、第22次調査部分で出土した須恵器杯蓋（TK-10型式）と特徴が共通しており、これらの須恵器がほぼ同時期の所産である可能性が考えられる。以上から、竪穴住居3は6世紀前半、あるいはそれ以前に機能していたものと考えられる。

**竪穴住居4** 調査区南部において、東辺の一部と南東隅を検出しただけにとどまる住居である。当該住居は、第22次調査では確認されておらず詳細は不明であるが、一辺3m以上で方形の平面形を呈することが考えられる。壁溝中から弥生土器、土器片が出土したが、細片であり図化しえなかった。正確な時期は特定できないものの、須恵器が含まれないことから古墳時代前半期の所産と考えられる。

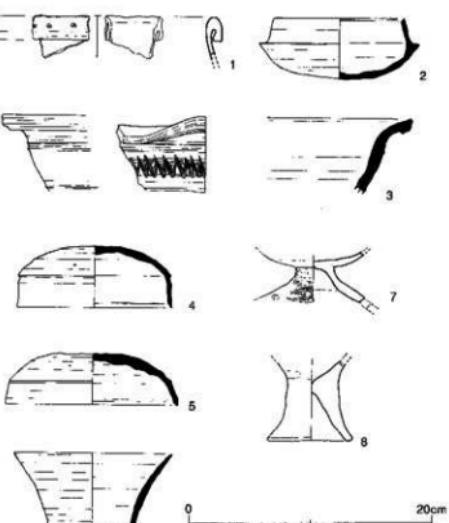
**竪穴住居5** 調査区東側において検出した、方形の平面形を呈する住居である。当住居は北西隅付近の検出にとどまるため正確な規模は不明だが、西辺を参考にすると一辺5m以上と考



第15図 竪穴住居5 平面図（1：60）

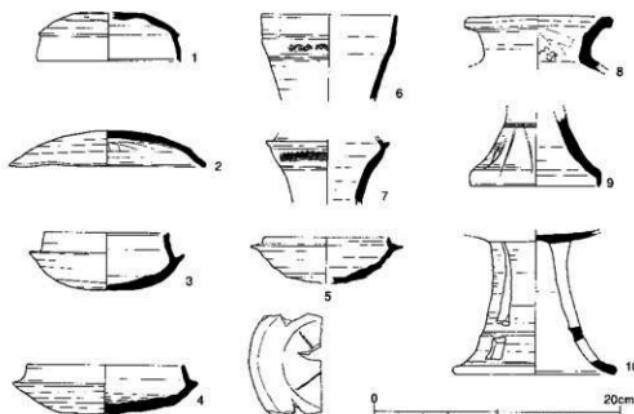
えられ、これに併行して内側にも一辺3m以上をはかる壁溝をほぼ同一レベルにおいて検出しており、二重の壁溝を有している。住居内の埋土は後世の削平などの理由によって遺存していないが、本来は内側の壁溝より内外で多少の高低差が存在した可能性も考えられる。なお、壁溝内側で検出した径0.3~0.4m、深さ0.25m程度をはかる柱穴1・2は、当住居の主柱穴である可能性が考えられる。また、ほぼ中央部分において径約0.35mの焼土を検出したが、炉穴を伴わず基底面上に約2cm程度堆積するのみであることから、地床炉である可能性が考えられる。遺物は内外の壁溝中から弥生土器、土師器細片が微量出土したが、須恵器は出土していない。よって、竪穴住居5は古墳時代前半期に帰属するものとみられる。

**土坑・ピット出土遺物（第16図1~8）** 第16図1~3は土坑1出土である。1は復元口径22cmをはかる壺の口縁部とみられ、先端を折り返しその内側に径4mm程度の竹管文が不規則な間隔で施される。内外面ともに丁寧なナデによる調整である。胎土は在地のものと異なりにぶい黄褐色を呈する。2は須恵器杯身であり、口径10.6cm、器高5.0cmをはかる。口縁端部内面には明瞭な凹線が巡る。受部の先端は明瞭な稜を有する。3は須恵器器台の口縁部であり、復元口径34cmをはかる。体部に巡る突線は非常に鋭い。また、土坑1では土器以外に岡版8:(2)~2にみるような有茎式の打製石鏃が出土している。残存長5.9cm、最大幅1.3cm、最大厚0.6cmをはかり、刃部先端部と基部は欠損している。断面は菱形に近いレンズ形を呈する。調整剥離は全体に非常に細かく稜も不明瞭である。4はピット1、5はピット2出土の須恵器杯蓋であり、それぞれ口径12.8cm、14.2cmをはかる。4は天井部と口縁部の境界に明瞭な稜を有し、口縁端部内面は凹線がみとめられる。5は天井部と口縁部の境界が鈍い凹線によって区別され、口縁端部は丸く収まるものである。6はピット3から出土したものであり、口縁部の傾きに疑問を残すが、須恵器半瓶の口縁部とみられ復元口径12.8cmをはかる。7は低脚高杯とみられ、



第16図 土坑・ピット出土遺物 (1:4)

## 2. 調査の成果



第17図 包含層出土遺物 (1 : 4)

ピット4からの出土である。残存高4.1cmをはかり、裾部径は口径を上回る可能性が考えられる。下半部には円形の穿孔が三方向に施される。脚部外面は上部で縦方向、下半部では横方向のミガキを施す。なお、杯部内面には赤色顔料が若干付着しており、当初は丹塗りであった可能性が考えられる。庄内式期の所産とみられる。8はピット5出土の台付壺もしくは鉢の一部と考えられる。底部径7.0cmをはかり、裾部は大きく開かない。

包含層出土遺物（第17図1～11） 図化できたものは須恵器に限られる。1は杯蓋であり、3～5は杯身である。杯蓋・杯身は口径や形態の特徴などから口径が10～12cm内外に収まるもの（1・3）と、口径が14～16cmに収まるもの（4）に大まかな分類ができる。また5は口径10.0cmをはかり、かえりは1cm程度とあまり立ち上がりがないものである。底部外面にはヘラ状の工具による線刻が2本みとめられ、「×」印となる可能性が考えられる。第17図1・3・4よりも時期的に新しく7世紀初頭前後の所産とみられる。2は蓋の一種とみられ、口径15.0cm、器高2.8cmをはかる。内・外面ともに丁寧な回転ナデを施し、口縁端部は強いナデによってやや外反する形態を呈する。天井部内面には回転ナデ後に不定方向の静止ナデがみとめられる。6は直口壺の口縁部とみられ、復元口径11.2cmをはかる。やや外へ開き気味に立ち上がり、口縁部下でわずかに屈曲する。頸部～口縁部には2条の凹線とその間に波状文が施される。7は有蓋壺の口縁部～頸部である。かえりの先端部分を欠損しているため正確な口径は不明である。外面には2条の凹線とその間に波状文が施される。8は壺口縁部片である。頸部内面には体部との接合時に生じたとみられるナデ状の調整痕が明瞭に残る。9は高杯脚部であり、脚部高は6cm程度とみられる。透かしを有するが破片のため図化し得ていない。外面には凹線とカキメ

が施され、その後鋭利な工具によって縦方向の刻線が少なくとも4本施される。10は高杯脚部であり、脚部高10.8cmをはかる。3方向に長方形の透かしを二段に有し、その間に2条の凹線が巡る。図版8：(2)～3は小片ではあるが打製石器の一部とみられ、基部から茎部部分とみられる。

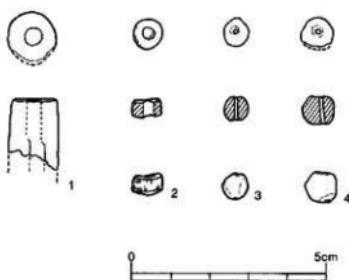
以上、包含層出土須恵器をみると5世紀末葉頃(TK-47型式)～7世紀初頭前後(TK-209型式)間に収まっており、なかでも6世紀前半に帰属するものが主体である。

玉類(第18図1～4) 1は溝1上半部分出土の管玉である。直径12.5mm、残存長19mmをはかり、胴部中央に向かってやや膨らむ形状である。径3.5mmの孔が両側から穿たれている。色調は外面は暗緑灰色、断面は緑灰色を呈する。3・4の上玉は包含層中の出土であり、いずれも表面にはぶい稜がみとめられ、不整円形の形状を有する。3は直径約6.5mmをはかり、径0.5mmの孔が穿たれている。4は直径8.5mmをはかり、径1mm程度の孔が穿たれている。

### 3.まとめ

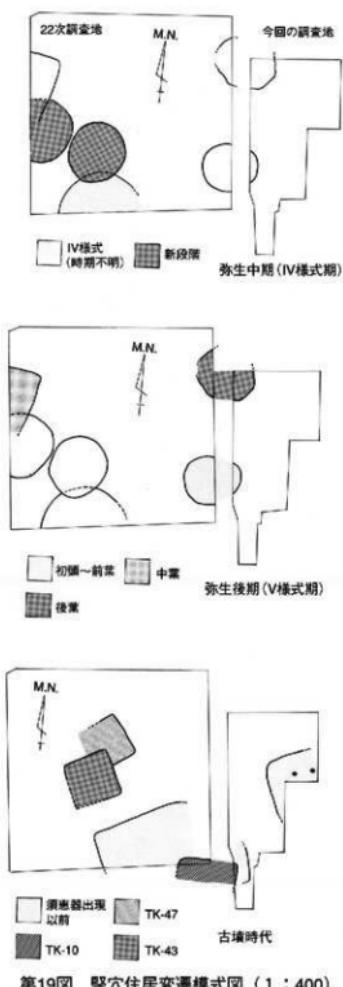
今回の調査地と第22次調査地の2つの成果を合わせることで、調査地周辺が弥生時代中期(IV様式期)～古墳時代後期後半(TK-43型式期)にわたって、主に竪穴住居を中心とした居住地であったことが明らかになってきた。ただし、古墳時代の須恵器出現以前については竪穴住居からの出土遺物が少量であり時期比定ができなかったため、当該期の竪穴住居の帰属時期は「前半期」として括している。今回および第22次調査では、いずれも6世紀後葉以降の明確な遺構はほとんど確認されず遺物もごく少量であることから、6世紀後葉以降、調査地周辺の集落は次第に衰退していくものと考えられる。

第19図はこれらの所見をもとに当調査地における竪穴住居の変遷を模式化したものである。調査地内における竪穴住居の初現は第22次調査で検出されたSH-6、SH-7であり、弥生中期新段階(IV様式期新段階)とみられる(SH-9は出土遺物少量のため詳細な時期が不明である)。ただしこの両住居が同時に営まれていたかは出土遺物からは推し量りがたい。中期新段階、後期に至っては各段階に1基程度の住居がみとめられるようである。統いて古墳時代になると、



第18図 玉類 (1 : 1.25)

### 3. まとめ



第19図 壁穴住居変遷模式図 (1 : 400)

前半期に3基確認されており、須恵器出現以降には、各型式期に1基程度の住居が営まれている様相がうかがえる。以上の変遷から2つの調査区内では、時期によって平面形や床面積に差異は認められつつも、弥生～古墳時代（前半期を除く）にわたって同時期に併存する住居数が1ないし2基程度と、ほぼ同様の居住領域を占有していたことが傾向として浮かび上がってくる。

弥生時代の新免遺跡では、過去の調査事例から3～5基の竪穴住居で構成される居住域とそこから近接した位置に造られる墓域（方形周溝墓群）を伴って規定される単位集団の存在が考えられている。今回の調査地は遺跡の北東部を占める単位集団の一角とみられているが、今回の調査では新たに弥生～後期の竪穴住居が確認されなかった。これは弥生時代の竪穴住居が第22次調査地から東側というよりも南北方向、または西側への広がりが考えられることとなった。また、今回の調査地周辺において弥生時代の方形周溝墓は現在も未確認であり、新免弥生集落における単位集団を居住域と墓域とを結びつけて把握するまでには至っていない。こうした課題については、今後の周辺の調査成果が待たれる。

#### 【参考文献】

- 服部聰志・岡村勝行編 「新免遺跡 第11次発掘調査報告書」 阪急宝塚線豊中市内連立体交差遺跡調査団・豊中市教育委員会 (1987)
- 山元 雄 「I. 第19次調査地点」「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1987年度」 豊中市教育委員会 (1988)

第IV章 新免遺跡第51次調査

## 1. 調査の経緯

当調査区は豊中市玉井町4丁目6に所在する。今回、個人住宅建築に伴い平成13年（2001年）5月9日に埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成12年（2000年）5月10日に確認調査を行った。この結果、敷地内に遺構の存在が確認されたことから本調査を行うこととなった。

## 2. 調査の概要

### (1) 基本層序

当調査区は、既往の調査区と同様に宅地造成および耕地開発に伴う削平が著しく、表土直下で遺構面を検出した。本来ならば、この間に耕作土、床土などが堆積していたものと考えられるが、住宅地となる過程で削平を受けたらしく確認できなかつた。

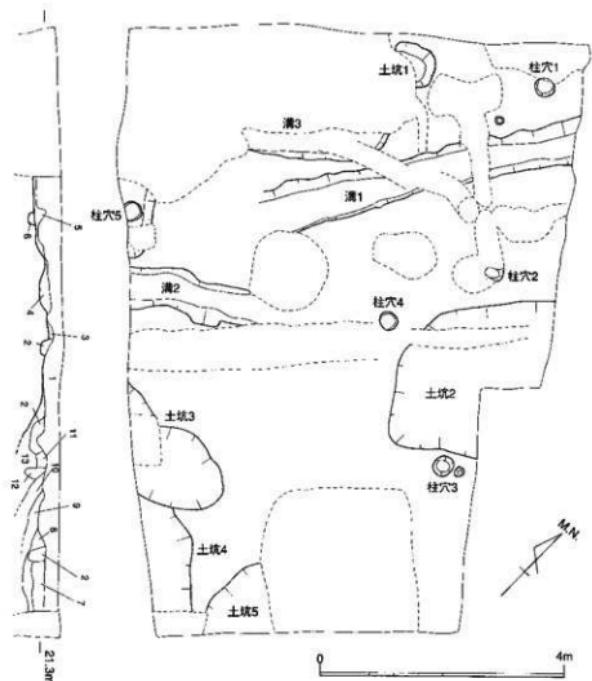


第20図 調査範囲図（1:200）



第21図 調査地位置図 (1:5,000)

## 2. 調査の概要



- 1. 表上 2. 掘丸
- 3. 灰黃褐色 (10YR6/2) 極細粒砂
- 4. 棕灰色 (7.5YR4/1) 細粒砂
- 5. 棕灰色 (7.5YR6/2) 微細粒砂 硫を含む
- 6. 灰褐色 (7.5YR6/2) 微細粒砂 硫を含む
- 7. 棕色 (10YR4/4) 稲穀粒砂 十筋を少量含む
- 8. 暗褐色 (10YR3/4) 極細粒砂 硫を少量含む
- 9. 黑褐色 (7.5YR3/4) 極細～細粒砂
- 10. 黑色 (7.5YR4/3) 極細～細粒砂
- 11. 暗褐色 (7.5YR4/3) 細粒砂
- 12. 黑色 (7.5YR4/4) 細粒砂
- 13. 黑色 (7.5YR4/4) 細粒砂 5～15mm大の炭縄を含む

第22図 調査区平面・断面図 (1 : 80)

### (2) 検出した遺構

当調査区において検出した遺構は、溝3条・土坑3基・柱穴を含むピット7基である。以下、各遺構について概要を述べる。

**溝1・2** 溝1・2は、ともに幅0.9m、深さ0.15m前後をはかり、略東西方向に伸びる。ともに埋土はにぶい黄色～黄褐色を呈する極細～細粒砂で、下層にシルトを含む。少量の遺物を含むものの、多くは磨滅した須恵器・土師器もしくは弥生土器を主体とし、時期を明証するものとは言いにくい。溝1・2は埋土から、中期以降の所産となるものと判断できる。

**溝 3** 溝3は、調査区北部の住宅解体に伴う擾乱などにより著しく削平され、全容は明確ではないが検出部分で幅0.5m以上、深さ0.2m以上の規模となる。埋土は上下2層に区分できるが、いずれも暗褐色板細粒砂を基調とする。溝は検出部分で略東西方向に伸びるもの、調査区の東西では確認できず、土坑となる可能性も考えられる。なお、溝上層から田辺編年TK-10型式前後に比定できる高杯形部の破片が出土しており、古墳時代後期の所産となる。

**土坑1** 調査区北部で検出した土坑であるが、住宅解体に伴う擾乱などにより著しく削平され、規模・深さなどの全容は明確ではない。検出面においては、わずかに基底部を確認しただけにとどまり、その性格などについても不明である。ただし、埋土の特徴を見る限り、溝3と大きく変わることろはなく、同時期の所産となる可能性が残されている。

**土坑2～5** いずれも、検出面上で遺物が採取され、遺構として掘削したもの、遺構埋土上と基盤層の差が明確ではなく、いわゆる倒木痕とされるものと判断した。各土坑の埋土をみると土坑2だけが黒褐色板細粒砂を、ほかは暗褐色板細粒砂を基調とする点で異なる。

なお、土坑5上面から須恵器細片とともに弥生中期の甕底部や石礫が出上している。

**ピット** 調査区北部一帯にかけて、柱穴を含むピットが若干検出されている。これらピットのうち、明確に柱痕が確認できるものは4基に限られる。また、柱穴1～3は柱間に間隔があるものほぼ南北方向で直線上に並ぶことから、建物等の一部となる可能性もあるが、確定するまでには至らない。なお、これら柱穴からは遺物が出土していないため、遺構の時期は明確ではない。

### 3.まとめ

今回の調査では、柱穴および溝・土坑を検出した。これらのうち、土坑2～5および中世以降の溝1・2を除く各遺構は、古墳時代頃の集落関連遺構となる。

ところで、当調査区の立地をみると、敷地の北側は千里川へ下る段丘崖となっており、北側の敷地との間にはおよそ1.8m程度の高低差があるが、遺構面は擁壁にいたるまで平坦であり、現状の地形は旧地形を切り上造成して成立したことが窺える。しかし、宅地化の過程で切り土造成が行われたにしても、旧地形にみる段丘崖までの距離は大きな隔たりはない。このことは、当該期の集落が既往の段丘崖の近くまで、その領域を拡大していた可能性を示すものと言える。同様の事例として、ほかに第47次調査区などがあり、このような状況は弥生時代中期以降、遅くとも古墳時代後期に一般化していた可能性が考えられる。

以上、今回の調査では新免遺跡における集落関連遺構を確認するとともに、これらの遺構から当遺跡における集落が段丘崖近くまでその領域を拡大していた可能性を示すに至った。しかし、このような領域の拡大に至るまでの過程については多くの課題が残されており、今後とも周辺における調査の進展が必要とされよう。



## 第V章 新免遺跡第52次調査

### 1. 調査の経緯

当調査区は、豊中市玉井町2丁目1に所在する。平成13年6月7日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて平成13年6月28日に確認調査を行ったところ、地表下約60cmで遺物包含層と遺構面を確認した。申請地では事務所ビルの建設が予定されており、それに伴う基礎掘削深度が遺構の損壊を免れないことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。調査は平成13年7月10日から平成13年7月27日にかけて実施した。

### 2. 調査の成果

#### (1) 基本層序

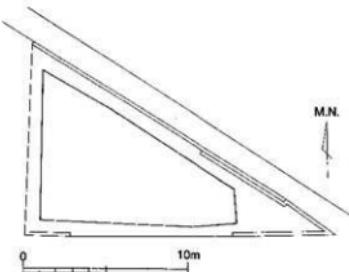
当調査区における基本層序は、1層：現代の盛土および搅乱土。2層：旧耕作土。3層：灰黄褐色細粒砂層。4層：にぶい黄褐色極細粒砂層は、中世前期頃の遺物包含層である。5層：黒褐色シルト層は、弥生～古墳時代後期頃の遺物包含層であり、同層中からは弥生土器、土師器、須恵器片が上下を問わず出土する。6層：灰白色シルト層は、当調査地の基盤層であり、その上面が遺構検出面に相当する。

なお、調査区北側では4層の堆積はほとんど確認できず、かわって3層が厚く堆積する。これは調査区の北側で中世前期頃に、弥生時代～古墳時代の遺構や4層を移動させるような人為的な作業等が行われた可能性が考えられる。なお、今回調査を実施した遺構の大部分は、6層（基盤層）上面において検出した。

#### (2) 検出した遺構と遺物

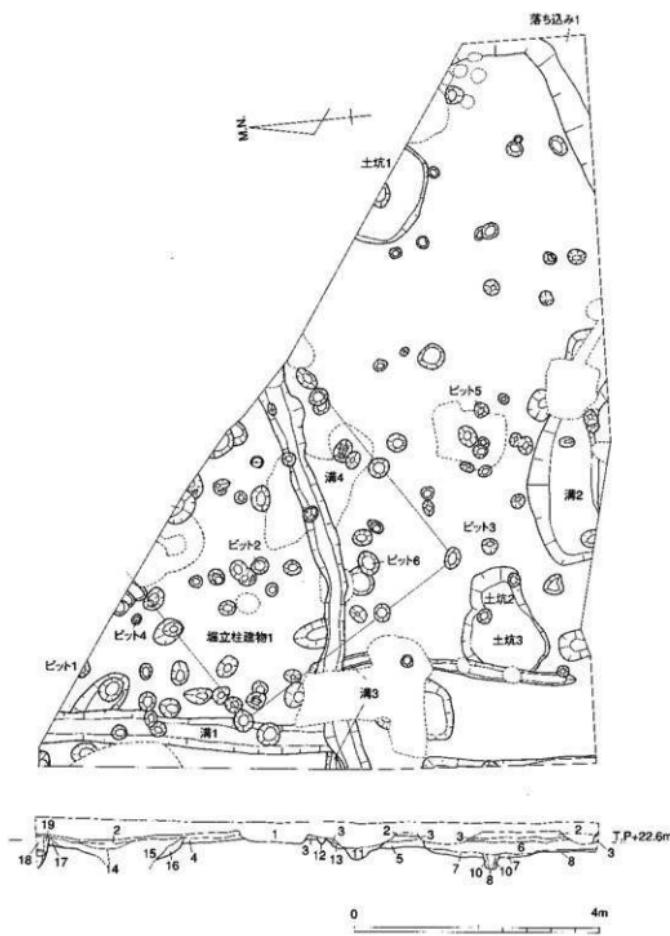
今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑4基、ピット約125基、落ち込み2か所、という内容であった。これらのうち、主要な遺構について、以下、報告する。

**掘立柱建物1** 調査区北東部分において検出し、三間（4.2m）×二間（3.3m）以上の規模を有する。柱穴の直径は0.3～0.5mで、深さは0.25～0.3mにはば収まる。柱間寸法は、それぞれ



第23図 調査範囲図（1:300）

## 2. 調査の成果



1. 灰色の墓土。 2. 黒褐色 (7.5YR6/2) 砂礫砂。2面作十。 3. 深黄褐色 (10YR4/2) 磨擦粒砂。4. にじむ黄褐色 (10YR4/3) 磨擦粒砂。中央の遺物付石塊。
5. 黑褐色 (10YR3/2) シルト。鉄生・内斎時代の遺物付石塊。6. 黑褐色 (10YR3/1) シルト。黑褐色ブロックを若干含む。
7. 黑褐色 (10YR4/1) 磨擦粒砂。磨擦層ブロックを若干含む。8. 黑褐色 (10YR3/1) シルト。品物層ブロックを幾箇に含む。9. 黑褐色 (10YR3/1) シルト。
10. 黑褐色 (10YR3/2) シルト。磨擦層ブロックを若干含む。11. にじむ青褐色 (10YR4/0) シルト。品物層ブロックを若干含む。深3cm。
12. 黑褐色 (10YR6/2) 砂粒砂。 13. 当褐色 (10YR3/1) 磨擦粒砂一シルト。深4cm上。 14. 黄褐色 (10YR7/2) 中一粗粒砂。しまり悪い。
15. にじむ青褐色 (10YR6/5) 中一粗粒砂。深4cm上。 16. 深黄褐色 (10YR4/2) 磨擦粒砂一シルト。品物層ブロックを若干含む。
17. 深黄褐色 (10YR3/2) 砂細粒砂。 18. 黑褐色 (10YR4/2) 磨擦粒砂。 19. 黑褐色 (10YR5/2) 磨擦粒砂。 20. 黑白色 (10YR8/1) シルト。当青生地の基盤層。

第24図 調査区平面・断面図 (1 : 80)

1.3~1.4m、1.8~1.9m程度をはかる。

各柱穴より、若干の須恵器片、土師器片、弥生土器片が出土したが細片のため図化できるものはなかった。須恵器片の出土などから、当該建物は古墳時代後期頃に帰属するものと考えられる。

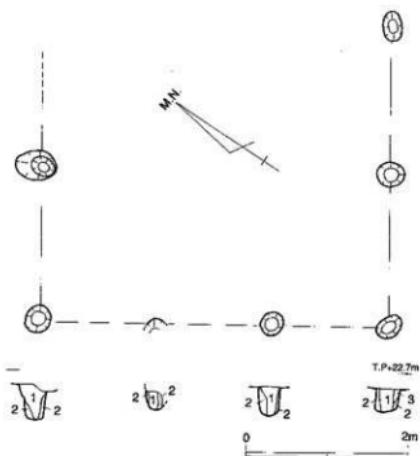
**溝 1** 調査区西側で検出した南北方向に伸びる溝である。ただし、溝4より南へは続かない。検出時の幅約0.35m、深さ0.1mをはかる。埋土はほぼ黒褐色シルトで構成され、基盤層ブロックを若干含むことから、埋戻し土と考えられる。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器などの細片であり、須恵器の特徴から溝1の埋没時期は古墳時代後期以降であったものとみられる。

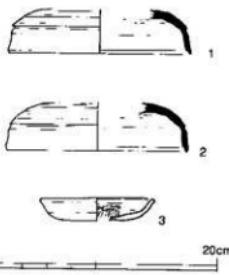
**溝 2** 調査区南側で検出した溝である。ただし、調査区内では北辺を検出したに過ぎず、大部分は調査区外へ伸びている可能性が考えられる。検出時の最大幅約1.2m、深さ0.1mをはかる。埋土は黒褐色シルトの単一層であり、基盤層ブロックが若干含まれることなどから埋戻し土とみられる。出土遺物はいずれも細片であるが、弥生土器、土師器、須恵器などが挙げられる。これらの特徴から、溝2は古墳時代の所産とみられる。

**溝 3** 調査区西側で検出した、逆「L」字形に伸びる溝である。幅約15cm、深さ約6cm、残存長は南北約4m、東西約1.6mをはかる。屈曲部分は溝4、および搅乱等で確認できなかったが、溝の規模、ならびに埋土（黒褐色極細粒砂）などの特徴が共通することから同・の溝と判断した。出土遺物は、細片であるが弥生土器、土師器、須恵器片等であることから、溝3は古墳時代後期以前に機能していたものと考えられる。

**溝 4** 調査区中央部分を東西方向に伸びる溝である。検出時の幅約0.4m、深さ0.25mをはかる。埋土はにぶい黄褐色極細粒砂の単一層で構成され、同層中に基盤層ブロック

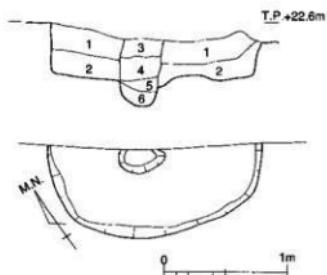


第25図 堀立柱建物1平面・断面図（1:60）



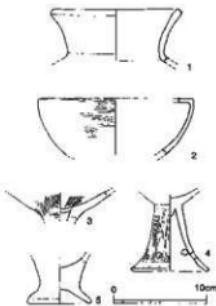
第26図 溝4出土遺物（1:4）

## 2. 調査の成果



1. 黒褐色 (10YR3/2) シルト。
2. 黒褐色 (10YR3/1) シルト。
3. 黒褐色 (10YR3/1) シルト～細粒砂。灰黄色 (10YR6/2) 細粒砂。黒褐色 (10YR3/2) シルト～細粒砂。
4. 黒褐色 (10YR3/2) シルト～細粒砂。
5. 黒褐色 (10YR3/2) シルト。素面ブロックを若干含む。
6. 灰黄色 (10YR3/2) 細粒砂。黒褐色 (10YR3/1) シルトブロックを若干含む。

第27図 土坑1平面・断面図 (1:40)



第28図 土坑1出土遺物

い立ち上がりを有する。埋土はほぼ黒褐色シルトで構成される。土坑基底部で見つかったピットは長軸0.4m、短軸0.2m以上を有する楕円形の平面を呈し、土坑基底面から0.15m程度の深さを有する。基底面のほぼ中央に位置し、断面観察では土坑を切っているものとみられるが、土坑1とピットとの関連については不明である。

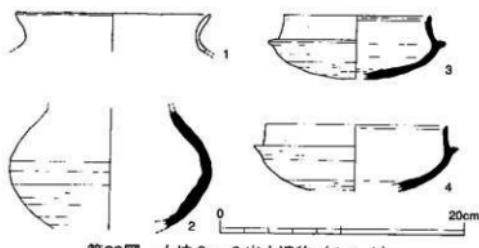
遺物は埋土中からまんべんなく出土した（第28図1～5）。1は広口壺の口縁部片であり、復元口径14.2cmを有する。内外面ともに磨滅が著しいため調整は不明である。2は傾きに疑問を残すが、鉢あるいは高杯とみられ、復元口径17.0cm、残存高6.3cmを有する。体部から口縁部に向かってゆるやかに立ち上がり、口縁部は内側に水平方向に伸びていく。内外面ともに磨滅が著しいため調整の観察も困難であるが、外面に横方向のミガキが確認できる。3は高杯の杯

クを若干含むことなどから、埋戻し土と考えられる。

遺物は主に埋土下半部分から集中して出土したが、岡化できたものは第26図1～3である。1・2はそれぞれ復元口径14.4cm、14.8cm、残存高3.6cm、3.8cmを有する須恵器壺蓋である。1は、天井部と口縁部の境界はにぶい稜を有する。2の天井部と口縁部の境界はにぶい沈線によって区別される。1・2ともに口縁端部内面にはにぶい凹線が施される。3は瓦質の小皿であり、復元口径9.1cm、残存高2.1cmを有する。体部外面は横ナデ、内面見込みには平行ミガキを密に施す。溝4は古墳時代～中世前期の遺物が混在して出土しているが、最も時期がくだる遺物（第26図3）等からみて12世紀代以降の埋没が考えられる。

土坑1 調査区東側で検出した。北側部分は調査区外へ伸びているため未調査であるが、直径約1.8m程度で、円形の平面形を呈するものと考えられる。検出面から基底面までの深さは約0.45mを有する。壁面はほぼ垂直に近

部と脚部の接合部分であり、内外面にはハケによる調整がみとめられる。接合方法は円盤充填法である。4は高杯脚部片である。裾部径は8.4cm、残存高8.3cmをはかる。脚部下半には焼成前の穿孔が2か所ずつ対向する形で施される。外面は主に縱方向のミガ



第29図 土坑2・3出土遺物 (1:4)

キによる調整が行われ、裾端部ではその後横ナデを施す。5は台付壺あるいは鉢とみられるが、外面に煤が付着していることから、壺の可能性が考えられる。底部径7.0cm、残存高4.8cmをはかる。外面は横方向のナデが施されるが、内面は磨滅のため調整は不明である。3・4の高杯にみられる特徴は主に庄内式の所産であることが考えられ、土坑1は当該時期あるいはそれ以前に機能していたことが考えられる。

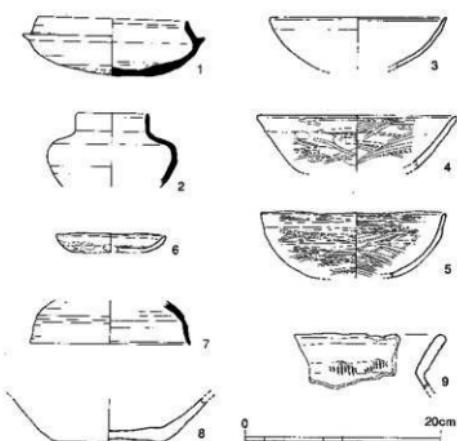
**土坑2** 西側が土坑3と重複しており、東西幅は不明であるが、南北幅は約0.8m、深さ約0.15mをはかり、不整円形をなすものと考えられる。埋土は黒褐色シルトの單一層である。出土遺物は土師器、須恵器杯身・杯蓋・壺等の破片であり、その特徴からみて古墳時代後期、あるいはそれ以前に機能していたものとみられる。

**土坑3** 調査区南側で検出し、東側は土坑2と重複する。東西幅約1.3m、南北幅約1.3m、深さ0.1m程度をはかり、不整円形を呈する。埋土はほぼ黒褐色シルトによって構成される。出土遺物は土師器・須恵器片が多く含まれることなどから、土坑2との時期差はほとんどないものと考えられる。

土坑2・3の出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器であり、図化できたものを第29図1～4に掲げた。1は壺の口縁部とみられ、復元口径15.6cmをはかる。外半する口縁部を有し、端部は平坦部を作らない。2は須恵器壺の体部とみられ、最大径16.4cmをはかる。体部上半は主に回転ナデ、同下半は回転ケズリを施す。3の須恵器杯身は復元口径12.2cm、残存高5.2cmをはかる。かえりは内側に立ち上がり、端部内面の沈線も明瞭である。田辺編年MT-15型式前後の所産と考えられる。4は復元口径14.8cm、残存高5.5cmをはかる。かえりはほぼ直線に立ち上がり、端部内面にはにぶい沈線が施されることなどから、TK-10型式の特徴に相当しよう。出土遺物の特徴からみて、土坑2・3は6世紀前半に機能していたものと考えられる。

**落ち込み1** 調査区東端において、東側へゆるやかに下がっていく落ち込みを検出した。最深部(調査区南東隅)は検出面からおよそ0.3mの深度をはかるが、調査区外へ傾斜が続いていることから、落ち込みの基底面は實際はさらに深度を有しているものと考えられる。埋土は他の遺構埋土と異なり、主にしまりの弱い灰黄褐色極細粒砂である。

## 2. 調査の成果



第30図 ピット・包含層出土遺物 (1 : 4)

いて報告する(第30図1～9)。1・2はピット1からの出土である。2は須恵器短頸壺であり、復元口径5.6cm、傾きに疑問を残すが残存高5.9cmをはかる。1は須恵器杯身であり口径12.1cm、器高4.8cmをはかる。1はその特徴からしてMT-15型式前後に相当しよう。3・4は瓦器椀片であり、いずれもピット2出土である。3は復元口径14.4cm、残存高4.3cmをはかる。内外面ともに磨滅が著しく遺存状態は悪いが、口縁端部は丸く收まり、その内面に1条の沈線を施す。4は復元口径16.2cm、残存高4.2cmをはかる。口縁部は外方にまっすぐ伸び、端部は丸く收まる形態である。外面には強い横ナデが施される。体部外面の上半は横ナデ、同下半は指オサエの後に横方向のミガキを施す。内面は横方向のミガキが密に施される。和泉型II-2～3期前後の所産と考えられる。5はピット3出土の瓦器椀であり、復元口径15.1cm 残存高5.3cmをはかる。内湾する口縁部を有する。内外面ともにミガキが密に施され、外面は分割割がみとめられる。和泉型II-1～2期頃の所産と考えられる。6はピット4出土の土師器小皿であり、復元口径9.2cm、器高1.8cmをはかる。12世紀代の所産とみられる。8はピット5出土の弥生上器底部片であり、復元底径8.8cm、残存高3.4cmをはかる。内外面ともに磨滅が著しく調整等は不明である。弥生時代中期の所産とみられる。9はピット6出土の土師器壺口縁部であり、小片のため口径の復元には至らなかった。内面には横方向のハケ、外面は口縁部が横ナデ、頭部は縱方向のハケを施す。7は4層(遺物包含層)出土の須恵器杯蓋片であり、復元口径13.0cm、残存高3.6cmをはかる。体部はやや開き気味であり、体部と天井部の境界部分は沈線が巡るもの不明瞭である。

以上、ピットおよび遺物包含層中からは、弥生時代中期をはじめとして、古墳時代中期～

出土遺物は、主に須恵器片であるが、特に基盤層直上付近からの出上りが目立った。さらに、これらの須恵器は細片かつ磨滅が著しいことから、流れ込んできた可能性が高い。したがって、落ち込み1は少なくとも古墳時代段階に存在していたことが考えられる。

### ピット・包含層出土遺物

当調査区では、先述の遺構の他に、ピットからも若干の遺物が出土しており、包含層中出土の遺物もみられた。以下、出土遺物のなかでも主要なものにつ

後期前半、中世前期頃の遺物が出土しており、これらの出土遺物が帰属する時期に当調査区において生活が営まれていたことは確実である。

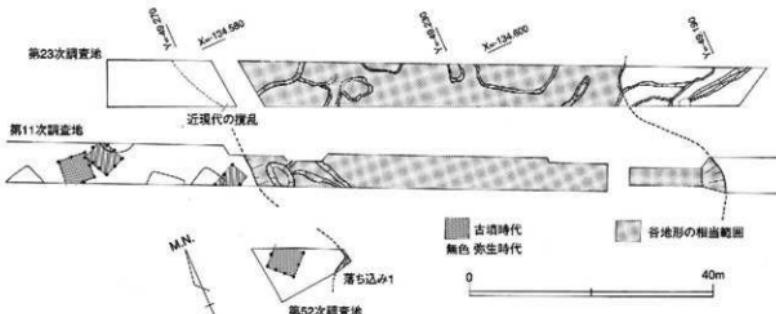
### 3.まとめ

今回の調査地は遺跡の北東端に位置し、主に弥生時代終末期、古墳時代中～後期、中世前期頃という、三時期の遺構を確認した。ただし、弥生時代中期の遺構（ピット5）がみられるところから、今回の調査地において当該期に集落の形成が始まっていたことが察せられる。

また弥生時代後期、古墳時代前期の遺構は確認されていないが、遺物は出土しており、今回の調査地において集落の形成が弥生時代中期に始まり、その後盛衰はあるものの古墳時代後期まで継続して営まれていたことを示す結果であると考えられる。検出した遺構の大半は柱穴であることから、その配置や深度、埋土の特徴などを手がかりに建物等の抽出も試みたが、現段階では古墳時代の掘立柱建物1棟の確認にとどまっている。

当初は、弥生時代、および古墳時代の遺構が中心になるものと考えていたが、中世前期頃の遺構が予想以上に検出された。これらは1985～86年度実施の第11次調査で検出された当該時期の遺構・遺物との関連が考えられ、主に調査地より北側において一定の広がりを有するものと考えられる。また、基底部に礫石を置いたとみられる柱穴も今回3基検出しており、当調査区でも建物が存在した可能性が高い。これらの成果から、遺跡の北東部において中世集落の広がりが考えられ、同時に新免遺跡に南隣する山ノ上遺跡（11世紀後半～）との関連も今後の課題として浮かび上がってきた。

また、先述の第11次調査において、北西方向に開析する深い谷地形（検出幅78m、深さ0.6～1m）を検出し、それに続く第23次調査（1985年実施）においてもその東肩を確認していたが、今回の調査区東端でみつかった「落ち込み1」は、検出位置や谷を埋めた土の特徴などから、



第31図 谷地形の分布（1:800）

### 3. まとめ

この谷地形と一連の所産である可能性が高いことが判明した（第31図）。そして造構の密度は、落ち込み1に近づくにつれて希薄になっていることからも、少なくとも当調査区において中世前期頃までは、集落の境界はこの谷地形に多少の制約を受けていたことが考えられる。とはいっても、古墳時代以降は（造構密度の濃淡はあるものの）谷地形以東にも集落の範囲が及ぶことが第11次調査で確認されており、時代が降るにつれ谷地形に規制されず居住域を拡大していく一面も明らかになっている。最後に今回検出した「落ち込み1」を通して現段階で把握できる谷地形の広がりについて触れておく。今回の調査地より北側では谷地形が検出されているが、南側にある第19次、40次、41次調査地（各調査地点は、第7図を参照のこと）では谷地形に相当する落ち込みは確認されていない。第52次調査地より南側であるこれらの調査地で未確認であることは、谷地形が第52次調査地以南へは開析しないことがうかがえる。よって今回の調査地で検出した落ち込み1は谷地形の南端付近である可能性が考えられる。

以上、調査の概要について今後の予察も若干含めた報告を行ってきた。各時代のより具体的な集落領域および集落像の解明は、これまでの調査成果等を踏まえ慎重に行っていく必要がある。

## 第VI章 確認調査の成果

### 確認調査の概要

昨年度1月～3月および今年度4月～12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は、51件を数え、昨年度8件、今年度43件という内訳である。このうち、11件の調査で道幅等が確認されたが、建物の基礎掘削深度が道構検出面に及ばなかったことなどから、本格的な発掘調査には至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第32図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。なお、第32図中の1～8は昨年度実施分であり、9～51が今年度実施の確認調査である。

**第1表 確認調査一覧表**

番号	地名	所在地	調査日	調査原因	調査対象面積(㎡)	道幅の有無	調査後の処置	担当者	備考
1	板塀古墳群	中根町3丁目57-3	20010125	個人住宅建設	156.45	無	着工	陣内	
2	板塀古墳群	設楽町1丁目66-5	20010201	個人住宅建設	60.18	未確認	着工	清水	
3	木町通り	木町町1丁目297-2	20010308	個人住宅建設	83.83	有	再立会後着工	陣内	
4	庄内道路	庄内町3丁目99-10	20010215	個人住宅建設	56.4	未確認	着工	陣内	
5	板塀古墳群	南根町3丁目27-6	20010315	個人住宅建設	46.91	無	着工	陣内	
6	菅原塙跡	菅原町4丁目83号の一館	20010322	個人住宅建設	61.67	無	着工	陣内	
7	板塀古墳群	小坂町3丁目133	20010329	個人住宅建設	159.6	無	着工	陣内	
8	新光道路	新井町1丁目127-3	20010329	個人住宅建設	96.13	無	着工	陣内	
9	木町通り	木町町1丁目1-12	20010412	個人住宅建設	36.85	有	再立会後着工	橋田	
10	上津長瀬跡	「津島2丁目124-1	20010426	個人住宅建設	70.07	未確認	着工	陣内	
11	新光道路	新井町1丁目186-1	20010426	個人住宅建設	45.36	無	着工	陣内	
12	大庭町古墳群	永楽町3丁目47-2の一部	20010426	個人住宅建設	80.54	無	着工	陣内	
13	大庭町古墳群	水美町4丁目53-2	20010510	個人住宅建設	56.4	無	着工	陣内	
14	箕輪遺跡	箕輪2丁目94-11	20010510	個人住宅建設	80.63	未確認	着工	陣内	
15	箕輪遺跡	箕輪2丁目95-8	20010510	個人住宅建設	53.46	未確認	着工	陣内	
16	木町通り	木町1丁目52-2	20010524	個人住宅建設	63.92	有	再立会後着工	清水	
17	新光道路	玉井町1丁目186-2	20010531	個人住宅建設	60.22	有	再立会後着工	橋田	
18	東川遺跡	菅原町4丁目66-7	20010614	個人住宅建設	34.97	未確認	着工	清水	
19	木町通り	木町3丁目297-1	20010614	個人住宅建設	73.98	未確認	着工	清水	
20	菅原塙跡	菅原塙1丁目304-27	20010705	個人住宅建設	62.24	無	着工	陣内	
21	菅原塙跡	菅原町4丁目83-6	20010705	個人住宅建設	59.75	無	着工	陣内	
22	庄内道路	庄内町3丁目90-3, 90-7	20010705	個人住宅建設	42.23	未確認	着工	陣内	
23	菅原古墳群	菅原町1丁目106-13, 105-13	20010712	個人住宅建設	42.34	無	着工	清水	
24	内田塙跡	佐の町3丁目5-1	20010726	個人住宅建設	54.15	未確認	着工	清水	
25	新光道路	木広町1丁目121	20010802	個人住宅建設	132.70	無	着工	橋田	
26	鶴田塙跡	鶴田町2丁目189-1	20010802	個人住宅建設	70.31	有	再立会後着工	橋田	
27	西町北遺跡	西町2丁目24, 24-1, 26-2	20010806	個人住宅建設	169.92	無	着工	清水	
28	安井谷古墳群	安井谷町3丁目66-1, 66-2	20010806	個人住宅建設	96.15	無	着工	清水	

## 確認調査・監査

番号	道路名	所在地	調査日	調査区分	法規(1) 地元課	査定の 状況 (△)	調査後の結果	担当者	備考
29	小曾根通路	西1丁目40-3	20010805	個人住宅建設	99.75	無	着工	福田	
30	新丸通路	玉井町3丁目123	20010803	個人住宅建設	90.26	有	内立会後審上	福内	
31	板塚古郷町	青柳町1丁目225	20010809	個人住宅建設	85.57	無	着工	福内	
32	リノ上通路	立石町2丁目106-1	20010820	個人住宅建設	60.68	未作認	未T	清水	
33	西町北通路	西町北2丁目24-3	20010805	個人住宅建設	118.4	無	着工	福内	
34	板塚古郷町	中柴原3丁目8-1	20010806	個人住宅建設	188.15	無	着工	福内	
35	山ノ上通路	山ノ上町29の一部	20010913	個人住宅建設	62.52	無	着工	福内	
36	本町通路	本町3丁目203-8	20010913	個人住宅建設	46.16	有	積重T事	福内	
37	豊島化粧所	黄竹町1丁目96-6	20010920	個人住宅建設	53.34	無	着工	清水	
38	小曾根通路	西1丁目27-1, 27-15	20010920	個人住宅建設	45.6	未作認	内立会後審上	福内	
39	新丸通路	玉井町3丁目153-12	20010920	個人住宅建設	58.31	無	着工	福内	
40	新丸通路	玉井町2丁目104-1	20010927	個人住宅建設	67.9	有	積重T事	福内	
41	リノ上通路	立石町1丁目126	20010927	個人住宅建設	66.49	無	着工	福内	
42	新丸通路	玉井町2丁目105, 205-2	20010927	個人住宅建設	110	有	内立会後審上	福内	
43	庄内通路	庄内西町4丁目35-6, 38-43	20011025	個人住宅建設	58.58	未作認	積重T事	福内	
44	東池北通路	宝池東町4丁目34-6	20011101	個人住宅建設	37.76	未作認	積重T事	福内	
45	横洋洋子通路	上野町2丁目114-13	20011101	個人住宅建設	69.02	無	着工	福内	
46	桜井古郷通路	富山町4丁目10-32, 14-33	20011101	個人住宅建設	48.31	無	着工	福内	
47	新丸通路	末次町1丁目60-5	20011115	個人住宅建設	76.43	無	着工	福内	
48	板塚古郷町	苦無西町3丁目	20011115	個人住宅建設	43.52	無	未T	福内	
49	岡町北通路	岡町北2丁目161	20011116	個人住宅建設	83.73	無	着工	福内	
50	利食通路	利食1丁目86-1, 1-2	20011213	個人住宅建設	57.43	無	着工	福内	
51	新丸通路	末次町3丁目19-3	20011220	個人住宅建設	102.98	有	積重T事	福内	



第32図 確認調査地点位置図(1:50,000)

## 2001-01 桜塚古墳群

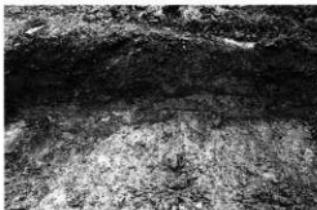
調査日：平成13年（2001年）1月25日

調査場所：豊中市中桜塚3丁目87-3

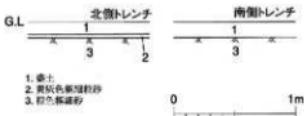
調査対象面積：136.45m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：北側・南側トレンチともに、地表下20~25cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。



第33図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第34図 トレンチ断面図

## 2001-02 桜塚古墳群

調査日：平成13年（2001年）2月1日

調査場所：豊中市曾根東町1丁目66-5

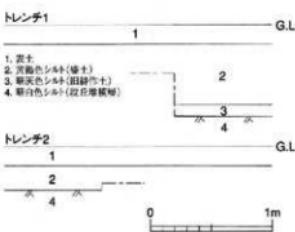
調査対象面積：60.18m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘トレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2でそれぞれ地表下70cm、35cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。



第35図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第36図 トレンチ断面図

## 2001-03 本町遺跡

調査日：平成13年（2001年）3月8日

調査場所：豊中市本町3丁目297-2

調査対象面積：83.83m<sup>2</sup>

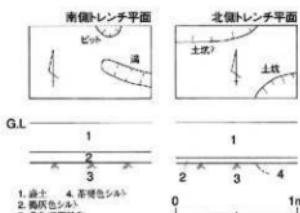
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：北側・南側トレンチともに、地表下65cmで遺構面を確認し、その上面でそれぞれ溝状遺構1、ピット1、土坑状遺構2基を検出した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、再立会の上、工事着工。



第37図 トレンチ掘削状況



第38図 トレンチ平面・断面図

## 2001-04 庄内遺跡

調査日：平成13年（2001年）3月15日

調査場所：豊中市庄内西町3丁目90-10

調査対象面積：59.4m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：北側トレンチにおいて地表下140cmでオリーブ灰色中粒砂層を検出したが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。



第39図 トレンチ掘削状況



第40図 トレンチ断面図

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。

## 2001-05 桜塚古墳群

調査日：平成13年(2001年)3月15日

調査場所：豊中市南桜塚3丁目127-5

調査対象面積：46.91m<sup>2</sup>

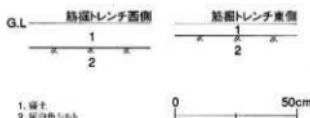
調査の方法：重機により筋掘トレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下5~10cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかつた。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第41図　トレンチ掘削状況



第42図　トレンチ断面図

## 2001-06 曽根遺跡

調査日：平成13年(2001年)3月22日

調査場所：豊中市曾根西町4丁目82の一部

調査対象面積：61.67m<sup>2</sup>

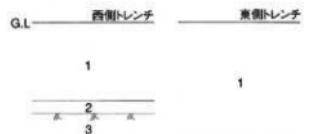
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：西側トレンチにおいて、地表下65cmで段丘堆積層を検出したが、東側トレンチでは地表下100cmまで掘削したが未検出であった。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。



第43図　トレンチ掘削状況



第44図　トレンチ断面図

## 2001-07 桜塚古墳群

調査日：平成13年（2001年）3月29日

調査場所：豊中市中桜塚3丁目133

調査対象面積：159.60m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘トレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：筋掘トレンチ1では地表下20~40cmで、筋掘トレンチ2では30~35cmで段丘堆積層を検出したが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第45図 トレンチ掘削状況



第46図 トレンチ断面図

## 2001-08 新免遺跡

調査日：平成13年（2001年）3月29日

調査場所：豊中市玉井町1丁目127-3

調査対象面積：96.13m<sup>2</sup>

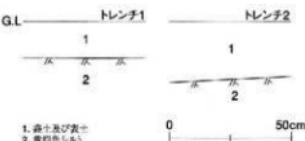
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：北側・南側トレンチとともに、地表下30~45cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第47図 トレンチ掘削状況



第48図 トレンチ断面図

## 2001-09 本町遺跡

調査日：平成13年(2001年)4月12日

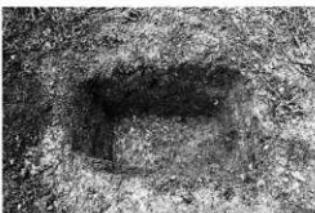
調査場所：豊中市本町2丁目1-12

調査対象面積：36.85m<sup>2</sup>

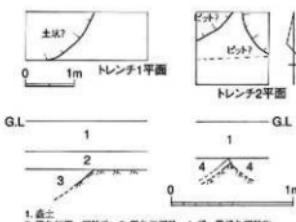
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに、地表下20~30cmで遺物包含層を、40cmで段丘堆積層を検出し、その上面においてピット等を確認した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、再立会の上、着工を指示。



第49図 トレンチ掘削状況



第50図 トレンチ平面・断面図

## 2001-10 上津島遺跡

調査日：平成13年(2001年)4月26日

調査場所：豊中市上津島2丁目124-1

調査対象面積：70.07m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：西側・東側トレンチとともに、地表下35~50cmまでは黄灰色粗~中粒砂層が堆積していることを確認し、明確な遺構・遺物とともに検出されなかった。



第51図 トレンチ掘削状況



第52図 トレンチ断面図

## 2001-11 新免遺跡

調査日：平成13年（2001年）4月26日

調査場所：豊中市玉井町1丁目186-1

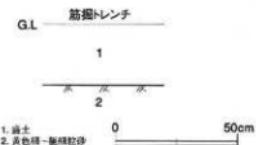
調査対象面積：45.36m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘トレンチ1か所を  
掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下25cmで段丘堆積層を確認し  
たが、明確な造構・遺物は検出されなかった。



第53図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第54図 トレンチ断面図

## 2001-12 太鼓塚古墳群

調査日：平成13年（2001年）4月26日

調査場所：豊中市永楽荘3丁目47-3の一部

調査対象面積：80.64m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘トレンチ1か所を  
掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下22cmで段丘堆積層を検出し  
たが、造構・遺物とともに確認されなかった。

申請地は、以前の宅地造成時に削平を受けて  
おり、古墳が残存する可能性は乏しい。



第55図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第56図 トレンチ断面図

## 2001-13 太鼓塚古墳群

調査日：平成13年(2001年)5月10日

調査場所：豊中市永楽荘4丁目53-2

調査対象面積：56.4m<sup>2</sup>

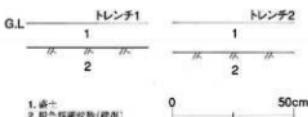
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：南西・北東トレンチとともに、地表下10cmで段丘堆積層を検出したが遺構・遺物ともに確認されなかった。申請地はすでに造成が行われており、古墳が残存する可能性は乏しい。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第57図 トレンチ掘削状況



第58図 トレンチ断面図

## 2001-14 箕輪遺跡

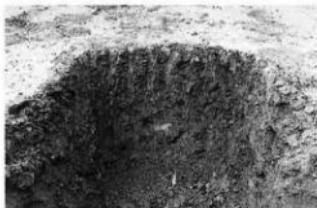
調査日：平成13年(2001年)5月10日

調査場所：豊中市箕輪2丁目94-11

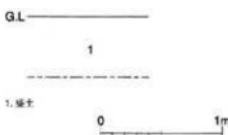
調査対象面積：50.55m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下50cmまで掘削したが、基礎掘削深度が盛土内に収まることを確認した。



第59図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。

第60図 トレンチ断面図

## 2001-15 箕輪遺跡

調査日：平成13年（2001年）5月10日

調査場所：豊中市箕輪2丁目94-8

調査対象面積：53.46m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80cmまで掘削し、基礎掘削深度が盛土内に収まることを確認した。



第61図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。

第62図 トレンチ断面図

## 2001-16 本町遺跡

調査日：平成13年（2001年）5月24日

調査場所：豊中市本町9丁目52,52-1

調査対象面積：63.92m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下20cmで遺物包含層を、同40cmで遺構面を検出しその上面において柱穴を検出した。トレンチ2では、遺構・遺物ともに確認されなかった。遺物包含層の遺物は希薄である。

調査後の処置：基礎掘削は遺物包含層内に収まることから、再立会の上、着工を指示。



第63図 トレンチ掘削状況



第64図 トレンチ平面・断面図

## 2001-17 新免遺跡

調査日：平成13年(2001年)5月31日

調査場所：豊中市玉井町1丁目186-2

調査対象面積：50.22m<sup>2</sup>

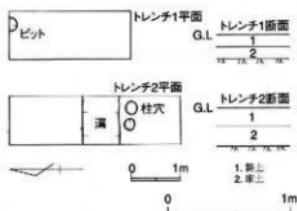
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下32cmで須恵器を含む清および柱穴を、トレンチ2では地表下20cmでピット1基を検出した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、再立会の上、着工を指示。



第65図 トレンチ掘削状況



第66図 トレンチ平面・断面図

## 2001-18 原田遺跡

調査日：平成13年(2001年)6月14日

調査場所：豊中市曾根西町4丁目56-7

調査対象面積：34.97m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下40cmまで掘削し、基礎掘削深度が盛土内に収まることを確認した。



第67図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。

第68図 トレンチ断面図

2001-19 本町遺跡

調査日：平成13年（2001年）6月14日

調査場所：農中市本町3丁目297-1

調査対象面積：73.98m<sup>2</sup>

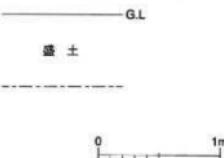
調査の方法：重機によりトレーナー 2か所を掘削し、トレーナー内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに、地表下60cmまで掘削したが、基礎掘削深度が盛土内に収まることを確認した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。



第69図 トレンチ掘削状況



第70図 トレンチ断面図

2001-20 穗積遺跡

調査日：平成13年（2001年）7月5日

調査場所：豊中市服部豊町1丁目204-27

調査対象面積: 52.24m<sup>2</sup>

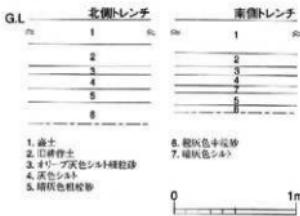
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに、地表下88  
～90cmで橙灰色粗～中粒砂層を検出したが、  
いずれも明確な遺構・遺物は確認されなかっ  
た。

調査後の処置：確認調査後、義工を指示



第71図 トレンチ掘削状況



第72図 トレンチ断面図

## 2001-21 曽根遺跡

調査日：平成13年(2001年)7月5日

調査場所：豊中市曾根西町4丁目82-6

調査対象面積：59.75m<sup>2</sup>

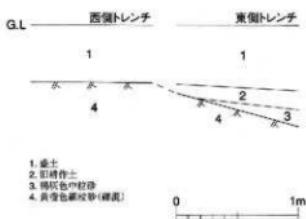
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：西側・東側トレンチでそれぞれ地表下47cm、84cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。また、旧地形が東側へ下がっていくことを確認した。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第73図 トレンチ掘削状況



第74図 トレンチ断面図

## 2001-22 庄内遺跡

調査日：平成13年(2001年)7月5日

調査場所：豊中市庄内西町3丁目90-3,90-7

調査対象面積：42.23m<sup>2</sup>

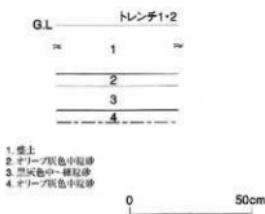
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：南西・北東トレンチとともに、地表下175cmで黒灰色中～細粒砂層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第75図 トレンチ掘削状況



第76図 トレンチ断面図

## 2001-23 桜塚古墳群

調査日：平成13年（2001年）7月12日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目195-13,195-15

調査対象面積：42.34m<sup>2</sup>

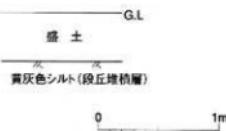
調査の方法：重機により筋掘2か所を掘削し、  
トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに、地表下40  
cmで段丘堆積層を検出したが、古墳周濠に該  
当する遺構・遺物は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第77図 トレンチ掘削状況



第78図 トレンチ断面図

## 2001-24 内田遺跡

調査日：平成13年（2001年）7月26日

調査場所：豊中市桜の町3丁目5-1

調査対象面積：54.15m<sup>2</sup>

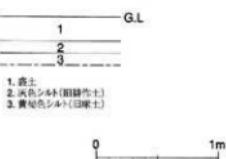
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削  
し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに、基礎掘削  
深度が耕作土内に収まることを確認した。

調査後の処置：基礎掘削は耕作土内に収まるこ  
とから、確認調査後、着工を指示。



第79図 トレンチ掘削状況



第80図 トレンチ断面図

## 2001-25 新免遺跡

調査日：平成13年(2001年)8月2日

調査場所：豊中市末広町1丁目121

調査対象面積：132.75m<sup>2</sup>

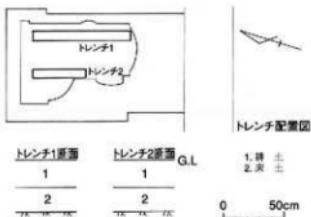
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2とともに、地表下23cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第81図 トレンチ掘削状況



第82図 トレンチ配置・断面図

## 2001-26 原田遺跡

調査日：平成13年(2001年)8月2日

調査場所：豊中市原田元町2丁目159-1

調査対象面積：70.31m<sup>2</sup>

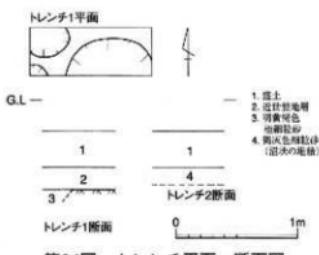
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において地表下75cmで中～近世の遺構を確認した。トレンチ2では近世末頃とみられる遺物包含層を検出した。

調査後の処置：基礎掘削深度の変更により、再立会の上、着工を指示。



第83図 トレンチ掘削状況



第84図 トレンチ平面・断面図

## 2001-27 岡町北遺跡

調査日：平成13年（2001年）8月6日

調査場所：豊中市岡町北2丁目24,24-1,24-2

調査対象面積：169.92m<sup>2</sup>

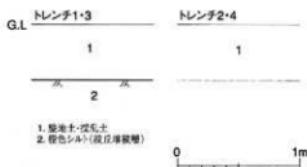
調査の方法：重機によりトレンチ4か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・3では、地表下約45cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物は確認されなかった。他のトレンチでは旧開発時の搅乱が著しく、段丘堆積層は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第85図 トレンチ掘削状況



第86図 トレンチ断面図

## 2001-28 桜井谷窯跡群

調査日：平成13年（2001年）8月6日

調査場所：豊中市東豈中町3丁目66-1,66-2

調査対象面積：96.16m<sup>2</sup>

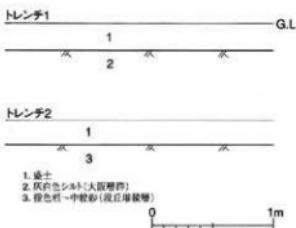
調査の方法：重機により、筋掘トレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに、地表下20～22cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第87図 トレンチ掘削状況



第88図 トレンチ断面図

## 2001-29 小曾根遺跡

調査日：平成13年(2001年)8月6日

調査場所：豊中市浜1丁目404-3

調査対象面積：99.78m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘トレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下約160cmまで掘削したが、遺構等は検出されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第89図 トレンチ掘削状況



第90図 トレンチ断面図

## 2001-30 新免遺跡

調査日：平成13年(2001年)8月9日

調査場所：豊中市玉井町3丁目123

調査対象面積：90.26m<sup>2</sup>

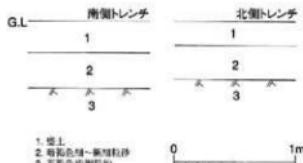
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：南側・北側トレンチでそれぞれ地表下48~55cmで段丘堆積層を確認したが明確な遺構は確認されなかった。ただし、盛土中に弥生土器片が混入することから、遺構等が存在する可能性が高いものと判断した。

調査後の処置：確認調査後、再立会の上、着工を指示。



第91図 トレンチ掘削状況



第92図 トレンチ断面図

## 2001-31 桜塚古墳群

調査日：平成13年（2001年）8月9日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目225

調査対象面積：55.57m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘トレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ内北側の搅乱部分を除いては、地表下15~25cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第93図 トレンチ掘削状況



第94図 トレンチ断面図

## 2001-32 山ノ上遺跡

調査日：平成13年（2001年）8月30日

調査場所：豊中市立花町2丁目108-1

調査対象面積：60.68m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに、基礎掘削深度が盛土内であることを確認した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。



第95図 トレンチ掘削状況



第96図 トレンチ断面図

### 2001-33 岡町北遺跡

調査日：平成13年（2001年）9月6日

調査場所：豊中市岡町北2丁目24-3

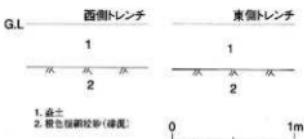
調査対象面積：118.4m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下35～37cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかつた。



第97図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第98図 トレンチ断面図

### 2001-34 桜塚古墳群

調査日：平成13年（2001年）9月6日

調査場所：豊中市中桜塚3丁目87-1

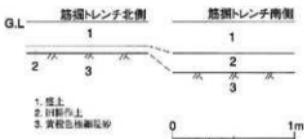
調査対象面積：188.15m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘トレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ内北側で地表下25cm、南側で地表下約40cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかつた。



第99図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第100図 トレンチ断面図

## 2001-35 山ノ上遺跡

調査日：平成13年（2001年）9月13日

調査場所：豊中市山ノ上町29の一部

調査対象面積：62.52m<sup>2</sup>

調査の方法：人力によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下28cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第101図 トレンチ掘削状況



第102図 トレンチ断面図

## 2001-36 本町遺跡

調査日：平成13年（2001年）9月13日

調査場所：豊中市本町3丁目263-8

調査対象面積：46.16m<sup>2</sup>

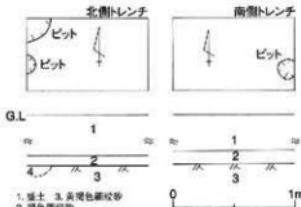
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：北側・南側トレンチとともに、地表下約60cmで段丘堆積層を検出し、その上面においてそれぞれピット1基、ピット2基を確認した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、慎重工事を指示。



第103図 トレンチ掘削状況



第104図 トレンチ平面・断面図

2001-37 豊島北遺跡

調査日：平成13年（2001年）9月20日

調査場所：豊中市曾根南町1丁目95-6

調查對象面積：53.34m<sup>2</sup>

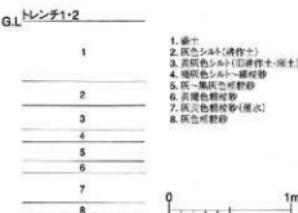
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削  
1... トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに、地表下200cmまで掘削したが、自然堆積層のみが検出され、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第105図 トレンチ掘削状況



第106図 トレンチ断面図

2001-38 小曾根遺跡

調査日：平成13年（2001年）9月20日

調查場所：農中市派1丁目271-14 271-15

調查對象面積： $45.6\text{m}^2$

調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削  
（トレンチ内を精査）

調査の概要：地表下115cmでオリーブ灰色極細粒砂層を検出し、その上面において中世の遺物が出土した。遺構は未確認であるが、周辺で本調査を実施しており、申請地内に遺構が存在する可能性は高いものと判断した。

調査後の処置：基礎掘削は旧耕作土内に収まる  
ことから、再立会の上、着工を指示。



第107図 トレンチ掘削状況



第108図 トレンチ断面図

## 2001-39 新免遺跡

調査日：平成13年（2001年）9月20日

調査場所：豊中市玉井町3丁目153-12

調査対象面積：56.31m<sup>2</sup>

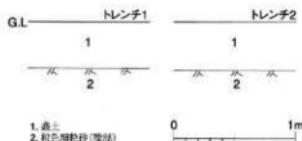
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：西側・東側トレンチとともに、地表下40cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第109図 トレンチ掘削状況



第110図 トレンチ断面図

## 2001-40 新免遺跡

調査日：平成13年（2001年）9月27日

調査場所：豊中市玉井町2丁目104-1

調査対象面積：67.9m<sup>2</sup>

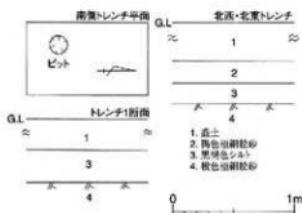
調査の方法：重機によりトレンチ3か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：各トレンチでは地表下76~82cmで段丘堆積層を検出し、このうち南側トレンチではその上面においてピット1基を検出した。他に遺構は確認されず、申請地内の遺構の密度は希薄であると判断した。

調査後の処置：確認調査後、慎重工事を指示。



第111図 トレンチ掘削状況



第112図 トレンチ平面・断面図

## 2001-41 山ノ上遺跡

調査日：平成13年(2001年)9月27日

調査場所：豊中市立花町1丁目126

調査対象面積：66.49m<sup>2</sup>

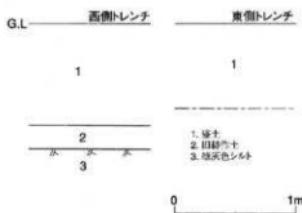
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：東側トレンチにおいて地表下103cmで段丘堆積層を検出したが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第113図 トレンチ掘削状況



第114図 トレンチ断面図

## 2001-42 新免遺跡

調査日：平成13年(2001年)9月27日

調査場所：豊中市玉井町2丁目205,205-2

調査対象面積：110m<sup>2</sup>

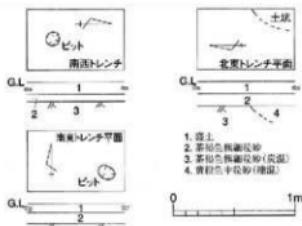
調査の方法：重機によりトレンチ4か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：南西・北東・南東トレンチにおいて、地表下56~60cmでそれぞれピット等の遺構と須恵器片を確認した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、再立会の上、着工を指示。



第115図 トレンチ掘削状況



第116図 トレンチ平面・断面図

## 2001-43 庄内遺跡

調査日：平成13年（2001年）10月25日

調査場所：豊中市庄内西町4丁目36-6,38-43

調査対象面積：58.38m<sup>2</sup>

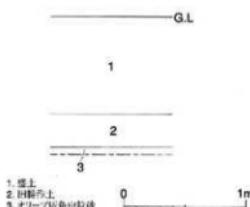
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下105cmでオリーブ灰色中粒砂を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第117図 トレンチ掘削状況



第118図 トレンチ断面図

## 2001-44 蛍池北遺跡

調査日：平成13年（2001年）11月1日

調査場所：豊中市螢池東町4丁目34-6

調査対象面積：37.76m<sup>2</sup>

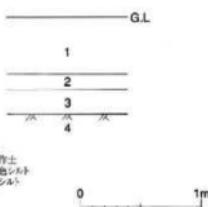
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80cmで段丘堆積層とみられる黄色シルト層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：隣接地で本調査が実施されていることから、慎重工事を指示。



第119図 トレンチ掘削状況



第120図 トレンチ断面図

### 2001-45 桜井谷窯跡群

調査日：平成13年(2001年)11月1日

調査場所：豊中市上野東2丁目144-13

調査対象面積：69.02m<sup>2</sup>

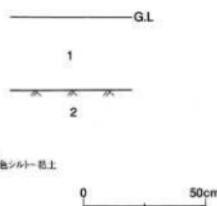
調査の方法：既存建物撤去時に露出していた壁面部分において断面観察を行なった。

調査の概要：地表下30cmで大阪層群を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。なお、申請地は斜面地を切土造成しているため、埋蔵文化財を包蔵する可能性は乏しい。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第121図 トレンチ内堆積状況



第122図 トレンチ断面図

### 2001-46 桜井谷窯跡群

調査日：平成13年(2001年)11月8日

調査場所：豊中市宮山町4丁目14-32,14-33

調査対象面積：48.31m<sup>2</sup>

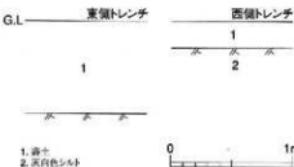
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：西側・東側トレンチにおいてそれぞれ地表下22・75cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第123図 トレンチ掘削状況



第124図 トレンチ断面図

## 2001-47 新免遺跡

調査日：平成13年（2001年）11月15日

調査場所：豊中市末広町60-8

調査対象面積：76.43m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：西側トレンチにおいて地表下36cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第125図 トレンチ掘削状況



第126図 トレンチ断面図

## 2001-48 桜塚古墳群

調査日：平成13年（2001年）11月15日

調査場所：豊中市曾根西町3丁目73-5

調査対象面積：43.52m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：北側・南側トレンチにおいてそれぞれ地表下48・40cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物とともに確認されなかった。



第127図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第128図 トレンチ断面図

## 2001-49 岡町北遺跡

調査日：平成13年(2001年)11月15日

調査場所：豊中市岡町北2丁目64

調査対象面積：83.73m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：南西トレンチにおいて地表下75cmで段丘堆積層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第129図 トレンチ掘削状況



第130図 トレンチ断面図

## 2001-50 利倉遺跡

調査日：平成13年(2001年)12月13日

調査場所：豊中市利倉1丁目867-1の一部

調査対象面積：47.43m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下50cmまで掘削したが、盛土内であることを確認した。



第131図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから、確認調査後、着工を指示。

第132図 トレンチ断面図

## 2001-51 新免遺跡

調査日：平成13年（2001年）12月20日

調査場所：豊中市末広町3丁目19-3

調査対象面積：102.98m<sup>2</sup>

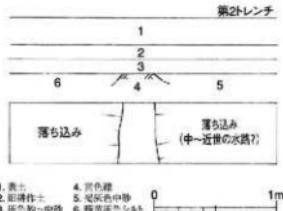
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：いずれのトレンチも地表下54cmで段丘堆積層を検出し、第2トレンチではその上面において2か所の落ち込みを確認した。

調査後の処置：基礎掘削は遺構検出面に及ばないことから、慎重工事の上、着工を指示。



第133図 トレンチ掘削状況



第134図 トレンチ平面・断面図



# 図 版



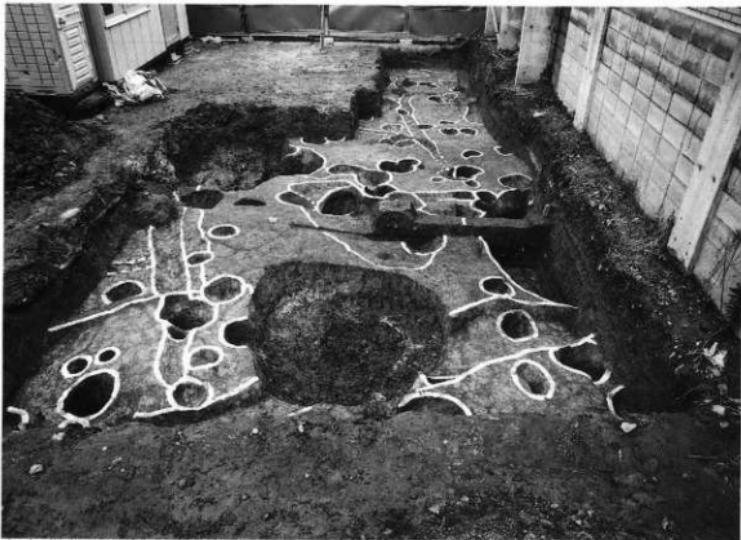
図版 1 穂積遺跡第28次調査



(1) 調査区全景(南から)



(2) 調査区西壁面



(1) 調査区南側全景（北から）



(2) 調査区北側全景（南から）



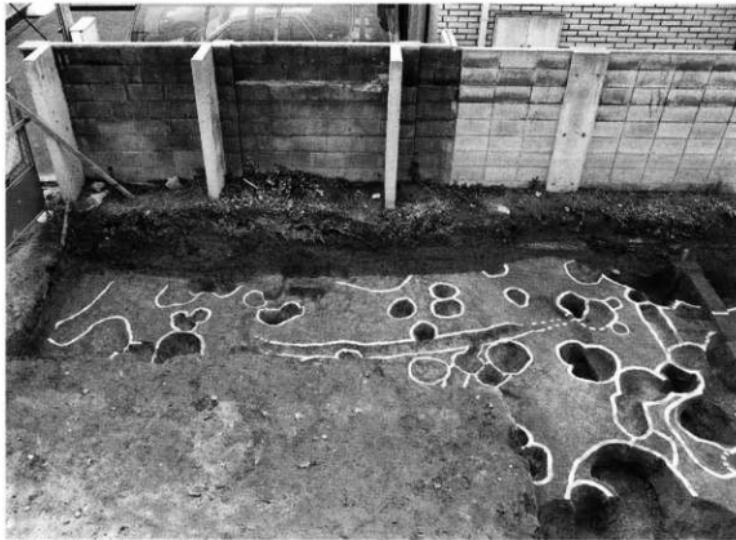
(1) 壇穴住居1遺物出土状況（北東から）



(2) 壇穴住居1完掘状況（北東から）



(1) 壓穴住居 2 (南西から)



(2) 壓穴住居 3・4 (東から)



(1) 壺穴住居 1 (第10図 1)



(2) 壺穴住居 1 (第10図 5)



(3) 壺穴住居 1 (第10図 3)



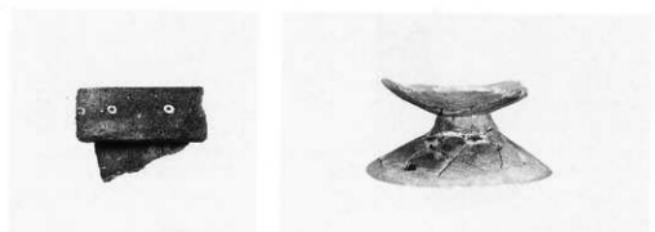
(4) 壺穴住居 2 (第12図 1)



(5) 土坑 1 (第16図 2)



(6) 土坑 1 (第16図 3)



(7) 土坑 1 (第16図 1)



(8) ピット 4 (第16図 7)



(1) 壺穴住居 3 (第14図 1)



(4) ピット 1 (第16図 4)



(2) 壺穴住居 3 (第14図 2)



(3)-1 杯部

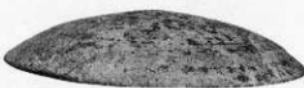


(3)-2 脚部

(3) 壺穴住居 3 (第14図 3・4)



(1) ビット2 (第16図5)



(2) 包含層 (第17図2)



(3) 包含層 (第17図4)



(4) 包含層 (第17図3)



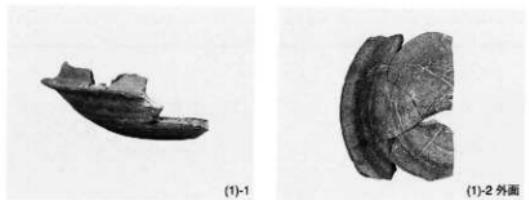
(5) 包含層 (第17図10)



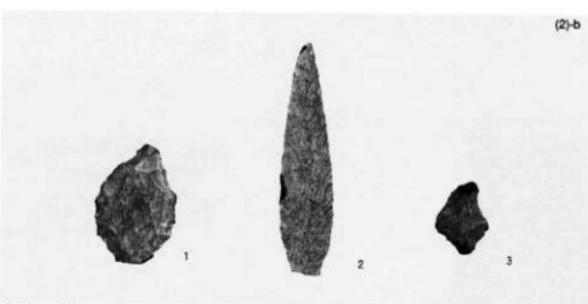
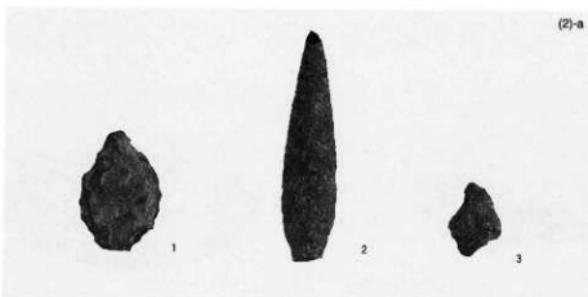
(6) 包含層 (第17図8)



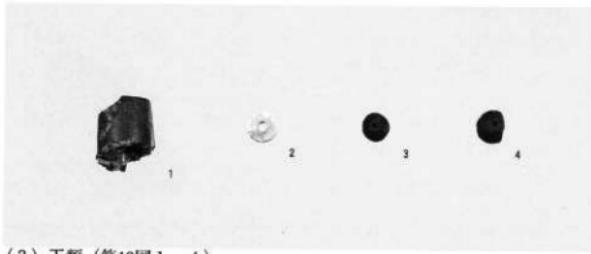
(7) 包含層 (第17図9)



(1) 包含層  
(第17図5)



(2) 石器



(3) 玉類 (第18図1~4)



(1) 1区全景（北から）



(2) 2区全景（南から）



(1) 調査区西側（東から）



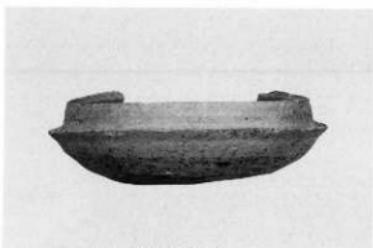
(2) 調査区東側（西から）



(1) 土坑 1 (南から)



(2) 落ち込み 1 (西から)



(1) ピット 1 (第30図 1)



(2) 土坑 2・3 (第29図 4)



(3)



(4)



(5)

(3) 土坑 1 (第28図 5)

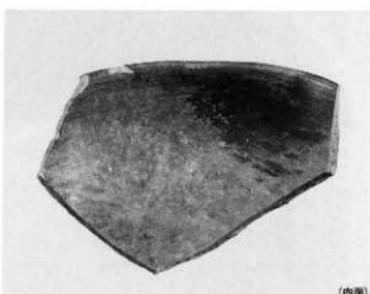
(4) 土坑 1 (第28図 4)

(5) 土坑 1 (第28図 2)



(外側)

(6) ピット 3 (第30図 5)



(内側)

報告書抄録

ふりがな 書名	とよなかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成13年度(2001年度)				
シリーズ名	第51集				
編著者名	橋田正徳・陣内尚志				
編集機関	豊中市教育委員会(市町村コード:27208)				
所在地	〒560-8501 大阪府豊中市中桜塚3丁目1-1 TEL06-6858-2581(社会教育課)				
発行年月日	西暦2002年3月29日				
所取遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積
穂積遺跡 第28次	服部西町 3-105-29	34°45'35"	135°28'33"	2000.11.27~ 2000.12.08	78m <sup>2</sup>
新免遺跡 第50次	玉井町 2-9	34°47'06"	135°27'47"	2000.10.23~ 2000.12.22	98m <sup>2</sup>
新免遺跡 第51次	玉井町 4-6	34°47'07"	135°27'50"	2001.05.21~ 2000.06.04	64m <sup>2</sup>
新免遺跡 第52次	玉井町 2-1	34°47'06"	135°27'46"	2001.07.10~ 2001.07.27	83m <sup>2</sup>
					事務所ビル建設

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
穂積遺跡 第28次	集落	弥生~古墳 平安~近世	溝、土坑等	上師器 須恵器	集落の西端部にあたる
新免遺跡 第50次	集落 古墳群	弥生~古墳 中世	堅穴住居 溝、土坑等	弥生土器 土師器、石器 須恵器、玉類	弥生中~後期、古墳時代の 集落開道遺構を多数検出
新免遺跡 第51次	集落 古墳群	弥生~古墳 中世	溝、土坑等	弥生土器 須恵器等	古墳時代頃の集落開道 遺構を検出
新免遺跡 第52次	集落 古墳群	弥生~古墳 中世	掘立柱建物 溝、土坑等	弥生土器 土師器、瓦器 須恵器等	弥生中~終末期、古墳中~ 後期、および中世前期の集 落開道遺構を検出



---

豊中市文化財調査報告書第51集

## 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成13年度（2001年度）

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

平成14年（2002年）3月29日

印刷 西村印刷株式会社

---